

日時 令和7年9月16日
会場 東京・有楽町朝日ホール

第64回 全国俳句大会選句集

主催 公益社団法人 俳人協会
後援 朝日新聞社

第64回全国俳句大会 次第

一、開 会（13時）

二、挨拶 片山会長

三、経過報告 小島大会委員長

四、選者紹介

五、表彰 片山会長

六、講評Ⅰ

休憩

七、講評Ⅱ

八、ジュニアの部

九、当日句・講評

十、閉 会（16時）能村 理事長

以上



●● 第64回全国俳句大会 大会賞 ●●

水が水つかみて滝の凍てにけり

愛媛県

穴野ししの

宏治こうじ

投げ出して鮫鰯捌く雪の上

広島県

石橋いしばし

康徳やすのり

変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ

東京都

平尾ひらお

美緒みお

テレビ消し戦争を消す春炬燵

静岡県

亀澤 かめざわ

淑子 としこ

火に水に神在す国新走り

福岡県

角野 かどの

良生 よしを

遊び足りたる春泥の靴ならぶ

富山県

小嶋 こじま トシコ

第64回 全国俳句大会 秀逸賞

貝殻はすべてなきがら八月来

愛知県

石川 いしかわ
裕子 ひろこ

目が見えて手が動かして毛糸編む

愛知県

稲熊 いなぐま
明美 あけみ

息たまに言葉となりぬ山桜

神奈川県

折勝 おりかつ
家鴨 あひる

千本のアキレス腱が山車を引く

富山県

荒田 あらた
眞智子 まちこ

窓広きこども食堂つばくらめ

千葉県

清水 しみず
陽子 ようこ

坐すは画家歩むは詩人黄落期

埼玉県

金子美津子
かねこみつこ

しやぼん玉追ひかけみんな光の子

東京都

小池博美
こいけひろみ

八月の被爆樹の影人の影

東京都

曽根新五郎
そねしんごろう

田回りの青大将を掲げ来る

神奈川県

倉谷安子
くらたにやすこ

レギュラーを外されし日の雲の峰

神奈川県

大木雪香
おおきせつか

次頁以降、各選者の特選三句及び入選二十句。
空欄は類句や既発表句のため削除したもの。

伊 藤 伊那男 選

井 上 弘 美 選

人の世に裏と表や障子貼る

息たまに言葉となりぬ山桜

火に水に神在す国新走り

路地ひとつ違へて京の旅はじめ

うしろ手に帯を確かむ菊日和

晩夏光本の売れたる隙間かな

乾杯のグラスのごときチューリップ

よく弾む洗濯ばさみ夏来る

古雛船場ことばの聞えさう

おみあしのごと撫で洗ふ遍路杖

春炬燵一人に慣れてしまひたり

桜湯の花を沈めぬほどの息

呼鈴の三度鳴るまで出ぬ炬燵

母入れて箱は柩に鳥雲に

陽炎や木曾馬は息太く立つ

何方がどつちあめんぼとその影と

人踏めば枯野の道となりにけり

貝殻はすべてなきがら八月来

大試験母の力のにぎり飯

クッキーを鳥の形にみどりの日

愛媛 穴野 宏治

神奈川 折勝 家鴨

福岡 角野 良生

千葉 鶴見 秀昭

神奈川 倉谷 安子

富山 荒田眞智子

広島 坂本たか子

鹿児島 羽立 郁芳

大阪 福本せつこ

愛知 渡辺美智代

愛知 佐藤三千子

富山 畠山 美苗

広島 神根 信

長崎 小谷 一夫

静岡 林 浩世

福岡 永田 英子

徳島 橋本まり子

愛知 石川 裕子

静岡 前川 幹子

東京 安食 久子

投げ出して鯨鯨捌く雪の上

吹雪く夜や子と読むシートン動物記

火に水に神在す国新走り

帰り花ひとつは白き母の遺書

肩車子の手が月に届くまで

遣されし本に栗の紙雛

水垢離に締まる褌裸押し

田回りの青大将を掲げ来る

谷底に生活の道や桐の花

最果ての花野が包む駅灯り

地の底に遺跡掘る人遠郭公

亀鳴くや隆起に瘦せし潮汲場

母入れて箱は柩に鳥雲に

岩海苔に残る礁のかけらかな

神域を外れて雨の袋角

水打つて一番星を誘ひ出す

花いばら沖は太古の瑠璃の色

花種の音なきものを風に蒔く

水底に雨は届かず桜桃忌

ばたん雪新もて沸かす湯に浸り

月明のひかりを返す象の耳

広島 石橋 康德

北海道 中西 史子

福岡 角野 良生

東京 曾根新五郎

奈良 田村 英一

東京 石井 きき

岡山 杉本征之進

神奈川 倉谷 安子

神奈川 門脇 明子

兵庫 千堂 富子

埼玉 椎名佐和子

石川 海老名由美子

長崎 小谷 一夫

東京 山本 吉人

千葉 鈴木 禮子

埼玉 金子美津子

沖縄 仲間 文子

北海道 青木まゆ美

岐阜 森 瑞穂

島根 高橋 猛

東京 里見 游

今井

聖選

上田 日差し選

合宿の蚊帳吊つてあり体育館

卒業やフェンスの破れより握手

仕事もつ子に会ひに行くみどりの日

植木市値札に端数なかりけり

千本のアキレス腱が山車を引く

老人の爪よく伸ぶる芒種かな

あとせめてもう一匙と七日粥

かかかかと風引き摺つて子が走る

大阿蘇の微塵となりて土筆摘む

春の旅水平線に本を閉ぢ

春炬燵一人に慣れてしまひたり

目が見えて手が動かせて毛糸編む

名を呼ばれ梅の中より応へけり

客引きの腰にカイロの見えてをり

漁止めし老の立つ波止初燕

冷蔵庫より取り出だす化粧水

山を圧し冬満月の上りたる

刺股を拭く銀行の仕事始

ぼたん雪薪もて沸かす湯に浸り

徳島 飯田 醉亥

神奈川 外山 観佳子

富山 荒田 眞智子

岡山 杉本 征之進

富山 荒田 眞智子

大阪 瀬野 浩

大分 佐々木 素風

大分 小松 生長

愛知 古賀 勇理央

埼玉 大畑 光弘

愛知 佐藤 三千子

愛知 稲熊 明美

愛知 佐合 たけし

東京 中村 我人

香川 名越 奈緒

岩手 大平 春子

大阪 乾 祐子

埼玉 金子 慶子

島根 高橋 猛

しやぼん玉追ひかけみんな光の子

手を洗ふ水の重さよ花疲れ

貝殻はすべてなきながら八月来

植木市値札に端数なかりけり

たんぽぽ手に生き物係登校す

白息の待たされてゐる交差点

波音のかすかに届く小判草

河を見て海と言ふ児や土筆摘む

これよりの生は余白よかたつむり

動くもの動かざるもの蝌蚪の紐

水が水つかみて滝の凍てにけり

花冷や素手に転がす和蠟燭

かんばせは花の白さよ紙雛

鯖鮎の金剛力を釣り上ぐる

布靴の十一センチ青き踏む

日めくりの重き八月十五日

手を触れてみたき寝釈迦の臉かな

日めくりはをとひのまま鳥雲に

水底に雨は届かず桜桃忌

一步づつ近づく星座富士登山

真白とは貫緑のいろ花菖蒲

さくらさくら空に喝采あるごとし

湿らせて使ふ黒文字利休の忌

東京 小池 博美

富山 脇坂 琉美子

愛知 石川 裕子

岡山 杉本 征之進

神奈川 大沢 幸子

広島 坂本 たか子

広島 坂本 たか子

広島 坂本 たか子

静岡 坂本 操子

岡山 杉本 征之進

愛媛 穴野 宏治

埼玉 神野 昭子

岡山 樋口 千恵子

埼玉 佐藤 弘

奈良 高橋 翠

東京 曾根 新五郎

静岡 杉澤 修

長野 宮澤 薫

岐阜 森 瑞穂

東京 今田 清三

佐賀 大隅 三虎

熊本 加藤 いろは

東京 高山 檀

大串

章選

小川 軽舟選

帰省子の先づ鍵盤に向かひけり
燕の子千里の飛翔まだ知らず

埼玉 佐藤 弘
石川 東 洸陽

一宿の宿へ一礼遍路発つ
皺の手とぎこちなき手の盆踊

東京 清水ひとみ
神奈川 福田 仁子

百歳の叔父の銃創八月来
百歳の声晴れやかな初電話

群馬 桐野 梅子
秋田 宇佐見レイ子

指と指合はせてハート卒業生
浜木綿やかつて鯨の解体場

静岡 河江 昌子
広島 坂本たか子

斑猫を追うていつしか八十路かな
昭和史に戦と平和敗戦日

富山 森 純子
佐賀 辻 洋子

水が水つかみて滝の凍てにけり
退院を控へし試歩や青き踏む

愛媛 穴野 宏治
福井 堀川久美子

落蟬のまだ終はれぬと翔びたてり
黒ネクタイ外し熱燗酌みにけり

大阪 大西きん一
長崎 小谷 一夫

穴出でし蟻に千里の山河あり
名を呼ばれ梅の中より応へけり

神奈川 別所 信子
愛知 佐合たけし

開拓の記念樹太く花吹雪
あたたかや二歳のあやす赤ん坊

栃木 久保 澄子
石川 松村 敏子

バス停に椅子ふるさとの山桜
どくだみを軒に吊して母白寿

北海道 河村里江子
奈良 越田はづき

けもの径行くはめとなり桜狩
遠足の子ら猿山の猿数ふ

京都 徳永 真弓
奈良 村手 圭子

庖丁の切つ先に立つ酢橘の香
歳旦の日差に拾ふ鷹の羽根

東京 森 恒之
山口 吉次 薫

讃美歌のやうな夕焼け港町
寒の雨仔牛は囀を蹴散らして

岡山 柴田 奈美
広島 坂本たか子

龍淵に潜み湖北に観世音
触読のふと止まりたる花の昼

滋賀 宮田絵衣子
兵庫 出店智恵呼

燕の子千里の飛翔まだ知らず
入学や子を東京に取られたる

石川 東 洸陽
長崎 小谷 一夫

穴出でし蟻に千里の山河あり
ぼろ市や伊万里も瀬戸もくくられて

神奈川 別所 信子
東京 福田由美子

目刺焼く三河七輪取り出だし
変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ

大阪 保母 洋子
東京 平尾 美緒

父母と弟の墓辛夷咲く
うぐひすや富士は一日雲の中

東京 山崎 奈穂
神奈川 鈴木千恵子

水底に雨は届かず桜桃忌
女正月ふるさと違ふ者はかり

岐阜 森 瑞穂
広島 田村祐巳子

一歩づつ近づく星座富士登山
猫の仔の名前の決まる夕餉かな

東京 今田 清三
埼玉 戸矢 一斗

ファールを気取りし父の夏帽子
裸木となりて怖るるものもなく

東京 あべゆう子
兵庫 山田 綾子

小澤

木の根明く土偶の臀部ふつくらと

實選
埼玉 高嶋 静

蛇出でて国東の野の眩しけれ

大分 田邊 博充

経糸緯糸布に成り行く日永かな

埼玉 須田 真弓

猪をかつぐ人に合掌径ゆづる

愛媛 安藤みつる

葱刻む忘れたきことありし日は

大阪 高倉 明子

海女小屋の敷居の高さ蟹歩く

三重 いりやま勝英

みづうみに触れては燕帰りけり

広島 坂本たか子

山の端に湧きて差羽の渡りけり

広島 坂本たか子

飛び込みの一身つつむ水の鞘

東京 吉田 祥子

古墳より古墳を望むうらけし

京都 池田 華甲

制服の丈出しきつて卒業す

東京 谷口 宏子

桜まじ船輝きて入港す

滋賀 野辺よつ葉

梅雨明けや子が踏み洗ふ柔道着

東京 田村登代子

「母入院」「母退院」と古暦

東京 平沼佐代子

西行庵尋めゐる雉子を翔たせけり

大阪 川上なみ子

秋風や外湯めぐりの男下駄

埼玉 久我 寿幸

ピースなんかするな少年原爆忌

神奈川 川島ちえり

さくら餅正座が楽といふ母と

神奈川 松下 宏民

どくだみを軒に吊して母白寿

北海道 越田はづき

初めてのスーッ皮靴入学す

大阪 西上 禎子

櫛

田舟吊る梁の昏さや斑雪

未知子選
愛知 原田津多江

「転生」といふ香水をつけてみる

東京 弾塚 直子

筋肉の輝いているプールかな

島根 足立 歩久

寝冷子の瞳素直でありにけり

神奈川 塚本 治彦

図書室にバレンタインの日の暮るる

長野 岩永はるみ

寄席はねて骨正月の町あかり

愛知 日比谷洋子

潮騒の島となりけり祭果て

広島 坂本たか子

街の灯を朝の消しゆく雨水かな

東京 加藤 完司

抜道に昭和の名残り秋の空

栃木 小林 由典

春昼や鏡があれば立ち止まる

神奈川 渡辺 一充

水が水つかみて滝の凍てにけり

愛媛 宍野 宏治

梅園を出でて俗世の人となる

茨城 狩野 勝吉

いつぼんの時間編みこむレースかな

高知 石川 渭水

鳥獣の耳は眠らず流水期

神奈川 小田 幸子

椎の花龍の匂ひと思ひけり

大阪 立川 六珈

ぼろ市や伊万里も瀬戸もくくられて

東京 福田由美子

日記買ふ水の暮れゆく御茶ノ水

東京 海野マツ子

水打つて一番星を誘ひ出す

埼玉 金子美津子

KOBANに子どもが二人蝶の昼

大阪 浅田 光代

牛の健啖山羊の健脚山笑ふ

奈良 福田えいじ

角谷昌子選

加古宗也選

窓広きことも食堂つばくらめ

八月の被爆樹の影人の影

火に水に神在す国新走り

夜勤後の人無き職場おぼる月

お産待つ牛舎に光る軒水柱

たんぽぽや空家作らぬ村の結び

山の端に湧きて差羽の渡りけり

寒鰯の豊漁に沸く地震の町

虫出しの雷に降り立つ家郷かな

卒業子校歌の川に稚魚還す

遠足子慰霊碑に手を合はせをり

比良比叡ずしりと据ゑて魼を挿す

ここにゐることが復興青き踏む

アッパツバ暮らしの下に活断層

しやぼん玉追ひかけみんな光の子

再雇用新社員とは席遠く

鳥のこゑ追へば深山の余花と逢ふ

花人に門開け放つ少年院

雪降るやポストは地震に反り返り

風が織る麦の穂波や農を継ぐ

貝殻はすべてなきながら八月来

大花野さみしき色を集めたる

トランクをひく底冷のアフファルト

梅雨明けや子が踏み洗ふ柔道着

坐すは画家歩むは詩人黄落期

笹子鳴く硯切り出すこの山に

百僧の息百僧の寒念仏

礫山の「女」見つめる新樹光

帰省子の先づ鍵盤に向かひけり

思ひきりこゑのぶつかる寒稽古

畳屋の広き門口風光る

祭馬草食みながら祓はるる

姉いもと隣りて住める日永かな

浜木綿やかつて鯨の解体場

虫出しの雷に降り立つ家郷かな

岡持が自転車で来る花堤

谷底に生活の道や桐の花

神木と呼ばれ千年木の根明く

誰よりも長き磯笛八十路海女

母の日のたたんで仕舞ふ包装紙

暮るるには間のありひとり門火焚く

春眠や本に挟みしままの指

八月の被爆樹の影人の影

真つ黒な運河の他は雪の街

また一人逆打ちといふ花遍路

また一人逆打ちといふ花遍路

千葉 清水 陽子
東京 曾根新五郎
福岡 角野 良生
山口 篠原 淳一
北海道 佐藤れい子
三重 伊藤 久子
広島 坂本たか子
富山 四宮 一子
富山 中坪 達哉
福岡 加藤 義博
大阪 小林 千晶
滋賀 土井 妙子
石川 宮田 勝
神奈川 内田知江子
東京 小池 博美
宮城 佐藤 べん
東京 平松 尚樹
愛知 土屋せつ子
石川 井端 久子
石川 不破 鏡子
愛知 石川 裕子
大阪 安里 道子
東京 星野 麻子

東京 田村登代子
埼玉 金子美津子
宮城 坂内 佳禰
東京 曾根新五郎
埼玉 神沢 英雄
埼玉 佐藤 弘
愛知 柴田 孝江
三重 近藤 昶子
広島 坂本たか子
秋田 神成 石男
広島 坂本たか子
富山 中坪 達哉
三重 浜西 修
神奈川 門脇 明子
北海道 市川 節子
愛知 渡辺美智代
富山 新村美那子
東京 衣川 洋子
大阪 大島 幸男
東京 曾根新五郎
京都 加藤 草児
高知 亀井しげみ

片山

由美子 選

加藤

かな文 選

シクラメン窓辺明るき保健室
テレビ消し戦争を消す春炬燵
花吹雪いまでも得意なかくれんぼ
投げ出して鯨鯨捌く雪の上
遠雷や肉切り包丁手に重く
河岸跡に残る米蔵猫柳
雪国の星降る音を聴きに行く
蜆舟舳先を高く戻りけり
かかかかと風引き摺つて子が走る
雛の間にひとまづ通す夜の客
春炬燵一人に慣れてしまひたり
しぶき上げ笑ひ声あげボート漕ぐ
鳥籠にもどらぬ小鳥暮の春
遊び足りたる春泥の靴ならぶ
稲架けて皆のごとき棚田かな
鳴き声に負けて子猫を拾ひけり
ゆく春の熊笹を打つ雨の音
日盛りの浮き棧橋の軋む音

兵庫 長野 順子
静岡 亀澤 淑子
東京 福本美恵子
広島 石橋 康徳
北海道 下山 春陽
茨城 飛田 伸夫
大阪 野口喜久子
島根 吉浦 増
大分 小松 生長
福島 大友 康子
愛知 佐藤三千子
神奈川 牛田 修嗣
千葉 山口ひろよ
富山 小嶋トシコ
広島 小倉 豈煩
岩手 郡司 山吹
神奈川 池田 忠山
東京 城子 康子

卯ほどの尖りあるべし敬老日
朝顔を咲かせ洗濯好きの人
息たまに言葉となりぬ山桜
初雪や少しはなれてわが家見る
入学児練習船に驚きぬ
讃美歌のやうな夕焼け港町
千本のアキレス腱が山車を引く
パソコンを手には花火師の席につく
木道は猿の溜まり場雪解けて
小春日や母がわたしにお辞儀して
地吹雪や重りのごとくランドセル
雛祭生まれなかつた二十二歳
薄水のなまくらとなり漂へる
森林鉄道に乗つて木曾の子入學す
極寒やバキリと音の折れ曲がる
手裏剣の飛んで来さうな木下闇
春の雲窓辺に吊るすフライパン
春愁や上目遣ひの占ひ師
もやもやもうずうずも春半ばかな
テレビ消し戦争を消す春炬燵
しやばん玉あの世をちよつと覗きたく
あたたかし大小のある半分こ
長き夜や体温計に窓ひとつ

千葉 葛西 茂美
愛媛 野村タカ子
神奈川 折勝 家鴨
茨城 菊池 珠枝
埼玉 角 達朗
岡山 柴田 奈美
富山 荒田眞智子
奈良 堀上 慶子
大阪 新谷 壯夫
広島 高田久美代
新潟 小黒 音榮
青森 長内 タキ
鹿児島 池田 貴之
東京 田沢健次郎
北海道 加藤 一実
東京 城子 康子
愛知 吉田 春陽
愛知 小林 節子
京都 辻 睦子
静岡 亀澤 淑子
京都 宮谷 昌代
大阪 宮川 育子
千葉 梅津 紀子

門柱に残るほてりや盆の月
猫の仔の名前の決まる夕餉かな
一山の傾くごとし蟬時雨
田に入りて大きく見ゆる稲刈機

静岡 関口喜代子
埼玉 戸矢 一斗
岐阜 小林 真木
香川 端 あつ子

古賀雪江選

変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ
啓蟄や素手にて攫むお礼肥
汗を拭き墓石を拭き汗を拭き
泥靴の立ち替りくる種物屋
炊き出しの匂ふ避難所つばめ来る
柿若葉干されて白き岩田帯
思ひきりこゑのぶつかる寒稽古
降る雪や戸口の狭き仮住まひ
田舟吊る梁の昏さや斑雪

東京 平尾 美緒
福島 吉原 瑞雲
京都 坂口夫 佐子
富山 杉本 恵子
石川 枅谷 栄子
愛知 上原 敬子
愛知 柴田 孝江
石川 中川 雅雪
愛知 原田津多江

潮の香のとどく駅舎に燕来る
退職のけふの母校の桜かな
一株の芹に蹟く芹の水
蒼天の富士に農鳥茶摘唄
茅葺の屋根に立ちたる雪解霽
減便の路線バス待つ文化の日
冴返る一段高き自刃の間
朝座禪雪掻きの息しづもれり
日脚伸ぶ虫めがね置く年金課
処理水を押し返したる春怒濤
噂や地層あらはに切通し
軒先の寒暮をめぐる郵便夫

新潟 佐藤さき子
山口 植野 史理
香川 原 さくら
静岡 いしづかすみれ
福島 湯田 畠道
滋賀 古川 武人
岡山 杉本征之進
三重 古川 和子
東京 石井 光子
福島 湯田 畠道
東京 高山 檀
愛知 古賀 理之

小島

目が見えて手が動かして毛糸編む
坐すは画家歩むは詩人黄落期
残心に朝日の差せる弓始
図書室にバレンタインの日の暮るる
ふくろふが鳴くまでホットウイスキー
千本のアキレス腱が山車を引く
田舟吊る梁の昏さや斑雪

愛知 稲熊 明美
埼玉 金子美津子
岡山 杉本征之進
長野 岩永はるみ
岐阜 福井 英敏
富山 荒田眞智子
愛知 原田津多江

水が水つかみて滝の凍てにけり
新しき椅子の弾力春を待つ
呼鈴の三度鳴るまで出ぬ炬燵
朝顔を咲かせ洗濯好きの人
盆供養すませ錠掛く親の家
遊び足りたる春泥の靴ならぶ
しやぼん玉追ひかけみんな光の子
山桜終の一戸へ咲きにけり
雪はねて竹たちあがる朝日かな
筋肉の輝いているプールかな
シスターの見事に跳べり春の泥
奥入瀬の弾む瀬音や木の根明く
霞草足して花瓶の向き決まる
ひとつつつ違ふ空ありしやぼん玉

愛媛 宍野 宏治
埼玉 町田美枝子
広島 神根 信
愛媛 野村タカ子
神奈川 瀧本 万忘
富山 小嶋トシコ
東京 小池 博美
栃木 野乃かさね
東京 嶋田 恵一
島根 足立 歩久
東京 石川 笙児
大阪 鶴賀谷 修
京都 徳永 真弓
東京 恩田 洋子

健選

坂本宮尾選

佐怒賀直美選

神木と呼ばれ千年木の根明く

北海道 市川 節子

よく弾む洗濯ばさみ夏来る

鹿児島 羽立 郁芳

寒晴や被災テントにカレーの香

茨城 内山 花葉

飛び込みの一身つつむ水の鞘

東京 吉田 祥子

違ふ物探し出したる春の昼

福岡 轟 あかね

大きさを競へば割るるしやぼん玉

愛媛 越智 春代

百僧の息百僧の寒念仏

東京 曾根新五郎

地の底に遺跡掘る人遠郭公

埼玉 椎名佐和子

枇杷の花千手は同じ物持たず

岡山 杉本征之進

若葉風牧を歩かす牛百頭

岐阜 早崎美弥子

なまはげの牙つけ直し鬼生まる

宮城 藤野 尚之

閉校の庭に残りし鴉の巢

宮城 柏木ともみ

河童忌や坂の途中の路地も坂

東京 野上 卓

亀鳴くや隆起に瘦せし潮汲場

石川 海老名由美子

烏帽子より垂るる巻髪針供養

愛知 安藤 亮子

母入れて箱は柩に鳥雲に

長崎 小谷 一夫

雪国の星降る音を聴きに行く

大阪 野口喜久子

額ばかり熱くなりたるどんだの火

岩手 工藤 陽子

人中に人の列ある祭かな

神奈川 倉谷 安子

ここにゐることが復興青き踏む

石川 宮田 勝

雲に触れ開く泰山木の花

広島 坂本たか子

シクラメン窓辺明るき保健室

兵庫 長野 順子

産み月の牛に一匹蠅まとう

広島 坂本たか子

初刷の紐をかけたる少年誌

東京 福田由美子

たんぽぽ手に生き物係登校す

神奈川 大沢 幸子

真つ黒な運河の他は雪の街

京都 加藤 草児

海女小屋の敷居の高さ蟹歩く

三重 いりやま勝英

百合を買ふもう病むことのなき人へ

東京 岡根 尚美

子の指の先にくつつく芋の露

埼玉 小川 悦子

刺股を拭く銀行の仕事始

埼玉 金子 慶子

浮葉田に音たて山雨きたりけり

広島 坂本たか子

この島を飛び出す勢ひ半仙戯

神奈川 浅木 ノエ

豚の仔の尾まで桃色花菜風

愛知 佐藤三千子

菊炭の白く崩るる夜更けかな

宮城 富士原志奈

椎の花龍の匂ひと思ひけり

大阪 立川 六珈

古草の絡まる鶏の蹴爪かな

青森 今 順子

行く春や山の匂ひの帽子置く

山形 菊地 秀雄

卒業や空拭くやうに手をふつて

愛知 中根由起子

花種の音なきものを風に蒔く

北海道 青木まゆ美

花御堂茸く大黒と肩ならべ

奈良 阪本 道子

海月群る波のうねりを重くして

石川 坂下多津緒

ライオンの貌に傷あり夏の草

東京 喜多尾うらら

卒業や空拭くやうに手をふつて

愛知 中根由起子

しなだしん選

白濱 一羊選

御朱印の乾く間合や百千鳥
轉や小枝で混ぜる梅毘布茶

愛知 渡辺美智代
富山 杉本 恵子

面とれば人といふ鬼鬼やらひ
かたちなき水を束ねて落ちる滝
卒業や空拭くやうに手をふつて
図書室にバレンタインの日の暮るる

東京 曾根新五郎
長崎 旗先四十三
愛知 中根由起子
長野 岩永はるみ

こもれ日をさらりと流す日傘かな

栃木 植木 英雄

摩崖佛口より蝶を放ちけり

神奈川 清水 善和

合宿の蚊帳吊つてあり体育館
炊き出しの匂ふ避難所つばめ来る

徳島 飯田 醉亥
石川 枅谷 栄子

野辺に鳴く子猫いだけばもう置けず

東京 田村登代子

屋根替の地べたに置ける鬼瓦
菜殻火の煙のなびく母郷かな

神奈川 堤 宗春
埼玉 伊藤 柳香

ここにゐることが復興青き踏む

石川 宮田 勝

稲架けて碧のごとき棚田かな
薄水のなまくらとなり漂へる

広島 小倉 豈煩
鹿児島 池田 貴之

眠る児を抱き風船を持て余す

大阪 村井津哉子

ふらここの軋みて二胡の音色めく
「母入院」「母退院」と古暦

石川 中川 雅雪
東京 平沼佐代子

老犬を乗せて少年櫓を曳く

山形 原田 みる

七福神めぐり仕上げのおかめ蕎麦
風花と行く山城の物見台

愛知 渡辺加美江
石川 酒谷 貞子

等伯の里や磯馴の松おぼろ

大分 富尾 和恵

この部屋で看取る覚悟や雛飾る
週刊誌二冊伏せあり磯竈

神奈川 藤川三枝子

父逝きてちちの匂ひの雪を搔く
イヤリング大きく揺らしラムネ飲む
葉牡丹や女ばかりの昼のヨガ
つちふるや飛来するもの皆怖し
目が見えて手が動かして毛糸編む
頼りなき手書きの地図や山笑ふ
春泥の靴の散らばる書道塾
山笑ふできなくなりし逆上り
坐すは画家歩むは詩人黃落期
船頭が手をかしてゐる春日傘
頬杖をついて金魚と見つめ合ふ
テレビ消し戦争を消す春炬燵
鳥雲に入るや星座のかたちして
貝殻はすべてなきがら八月来
桜しべ降る放課後の水飲み場
KOBANに子どもが二人蝶の昼
手を上げし場所がバス停うらけし
満ち潮のやうに暮春のジャズピアノ

新潟 高埜 健蔵
広島 坂本たか子
大阪 松本 峰子
東京 水野尾かつし
愛知 稲熊 明美
東京 小倉 陶女
埼玉 柳堀 悦子
東京 平尾 美緒
埼玉 金子美津子
神奈川 佐藤 享子
静岡 神田美穂子
静岡 亀澤 淑子
東京 みわ・さかい
愛知 石川 裕子
東京 鈴木伊都子
大阪 浅田 光代
東京 岩男澄美雄
東京 浦田 祐子

鈴木 しげを 選

鈴木 太郎 選

堂々と老人となり山笑ふ

愛知 水野 幸子

かるきものみな鳥になる花吹雪

新潟 渡辺 水穂

百僧の息百僧の寒念仏

東京 曾根新五郎

猿ぼぼを幾つも作る冬籠

新潟 小池 旦子

八十路来て今も戦後や草のもち

埼玉 古郡 孝之

卯ほどの尖りあるべし敬老日

千葉 葛西 茂美

初釜や駅もみ寺も西大寺

兵庫 田中 敏子

たんぼばや空家作らぬ村の結び

三重 伊藤 久子

火の匂ひ藁の匂ひの年用意

神奈川 倉谷 安子

百年の松に聖夜の金モール

茨城 岡澤 田鶴

口笛の父の機嫌や魚籠に鮎

神奈川 河村 笑

無念なる被爆の父の長崎忌

佐賀 辻 洋子

山の端に湧きて差羽の渡りけり

広島 坂本たか子

大の字の残りたるまま山笑ふ

東京 衣川 洋子

寒鰯の豊漁に沸く地震の町

富山 四宮 一子

職辞して日比谷公園夕桜

東京 小山 博子

甘蔗刈に呼ばれしのみのお暇とや

沖縄 宮城 勉

空は雲桜は鳥を遊ばせて

京都 詫間えりこ

遺影なる父しか知らず龍の玉

富山 吉野 恭子

桃の花故郷に古りし鯨墓

大分 芋岡 勝一

帯解きの双児の笑みに声かけぬ

東京 千田 節子

ここにゐることが復興青き踏む

石川 宮田 勝

龍淵に潜み湖北に観世音

滋賀 宮田絵衣子

地獄絵のたるんでゐたる日永かな

京都 平 万紀子

花冷の夜景の中へ帰りけり

神奈川 渡辺 一充

鳥帰る北は亡父の虜囚の地

千葉 藤埜まさ志

風見えて母郷何処も稲穂波

愛知 光田 道子

テレビ消し戦争を消す春炬燵

静岡 亀澤 淑子

微の香の師よりの手紙また仕舞ふ

広島 坂本たか子

火に水に神在す国新走り

福岡 角野 良生

変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ

東京 平尾 美緒

シスターの見事に跳べり春の泥

東京 石川 笙児

水かけて青む砥石や芹の花

三重 宮谷ふさ子

刺股を拭く銀行の仕事始

埼玉 金子 慶子

七輪に湯の沸いてをり花見茶屋

三重 宇田多香子

KOBANに子どもが二人蝶の昼

大阪 浅田 光代

橋の名はみんなひらがな揚雲雀

広島 黒宮 茂樹

連翹のかがやきの中埴輪あり

神奈川 江口 瑠里

両の手で井戸水もらふ桃の里

東京 濱田 ゆふ

クッキーを鳥の形にみどりの日

東京 安食 久子

染谷 秀雄 選

この水と生きて半生紙を漉く
 潮の香のとどく駅舎に燕来る
 山車蔵の高き一棟鳥帰る
 滝開き空より水の匂ひ来る
 水軍の鳥や戸毎に立葵
 漁火の重なり合うて海龍
 比良比叡ずしりと据ゑて魼を挿す
 藍染めの手に藍残る盆用意
 白魚の水を孕んで透き通る
 ばろ市や伊万里も瀬戸もくくられて
 変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ
 ひとひらの花をたたみし舞扇
 千年の仁王の臍に春の塵
 斑鳩の塔を遙かに若菜摘む
 三輪山の裾さらさらと岸の水
 薄墨の魚拓の匂ふ春時雨
 等伯の里や磯馴の松おぼろ
 組紐の駒音ひびく桜冷
 どくだみを軒に吊して母白寿
 奥入瀬の弾む瀬音や木の根明く
 播鉢に移るさみどり春惜しむ
 花筏集めて木場の貯木場
 かぎ針の一目をこぼす春の昼

島根 吉浦 増
 新潟 佐藤さき子
 東京 菊田 一平
 広島 坂本たか子
 広島 坂本たか子
 愛知 渡辺美智代
 滋賀 土井 妙子
 秋田 塚本 佐市
 東京 金子 竜胆
 東京 福田由美子
 東京 平尾 美緒
 岐阜 安田 一義
 神奈川 鈴木 基之
 京都 若見 洋子
 奈良 阿部由希子
 神奈川 宮永 忠夫
 石川 酒谷 貞子
 三重 川村 清子
 北海道 越田はづき
 大阪 鶴賀谷 修
 宮崎 日高まりも
 東京 高山 檀
 三重 金津やよい

高田 正子 選

通学の道しか知らず卒業す
 もしもしの後は春風糸電話
 バス停に椅子ふるさとの山桜
 図書室にバレンタインの日の暮るる
 乾杯のグラスのごときチューリップ
 初節句二台で運ぶ甥の竹
 武蔵野の星を数ふる三ヶ日
 健脚の母へ朝採れ茄子の馬
 ふらここを降りて翼を仕舞ひけり
 猫が踏み長靴が踏み犬ふぐり
 遊び足りたる春泥の靴ならぶ
 椎の花龍の匂ひと思ひけり
 降る雪や戸口の狭き仮住まひ
 「母入院」「母退院」と古暦
 サマードレス君と会ふ五分間のために
 じよつぱりの母の百年花林檎
 蝶々のあのねあのねと舞ひ来たり
 頬杖について金魚と見つめ合ふ
 春寒や子規の仰ぎし空の幅
 きつと故郷への電話花の下
 蝌蚪泳ぐ休耕田の水たまり
 卒業や空拭くやうに手をふつて
 千葉 塩野谷慎吾
 大阪 師岡 洋子
 東京 河村里江子
 長野 岩永はるみ
 広島 坂本たか子
 愛知 大巻 仁保
 東京 町田 珠子
 福岡 中嶋 麿澄
 埼玉 鈴木 恭子
 京都 中村 優江
 富山 小嶋トシコ
 大阪 立川 六珈
 石川 中川 雅雪
 東京 平沼佐代子
 愛知 長谷川せ津
 岐阜 名和よちゑ
 東京 頓所 友枝
 静岡 神田美穂子
 東京 相川 幸代
 東京 橋内 訓子
 鹿児島 窪見 れい
 愛知 中根由起子

谷口智行選

徳田千鶴子選

谷底に残る洗ひ場花茗荷

神奈川 八木 次郎

骨折の母と聖夜を過ごしけり

茨城 平野 悦子

母を恋ふ栗の渋皮剥く夜は

福井 畑下 信子

獵犬馳す獵夫の顎の動き見て

愛知 尾崎恵美子

一駅を眠る学生年の暮

岡山 西村 泉

蛇穴に入り大楠の幣揺るる

愛知 平松 公代

田回りの青大将を掲げ来る

神奈川 倉谷 安子

子の指の先にくつつく芋の露

埼玉 小川 悦子

あたたかし火曜日だけのぼん菓子屋

静岡 河江 昌子

ふらここのことは私に戻る場所

山形 五十嵐恒子

花屋から父のこと聞く彼岸かな

福岡 宮原 孝一

女子寮のフロントに立つ紙雛

鹿児島 松木蘭かつ子

ふらここのを降りて翼を仕舞ひけり

埼玉 鈴木 恭子

窓広きことも食堂つばくらめ

千葉 清水 陽子

通されて振子時計の夏座敷

東京 衣川 洋子

朝靄にしづむ一村草雲雀

石川 豊田 高子

急患のへりを見送る島の秋

東京 曾根新五郎

手裏剣の飛んで来さうな木下闇

東京 城子 康子

蝶々のあのねあのねと舞ひ来たり

東京 頓所 友枝

春浅し豆腐のやうに沈む鯉

神奈川 山本 浪子

百歳の叔父の銃創八月来

群馬 桐野 梅子

誰よりも長き磯笛八十路海女

愛知 渡辺美智代

それぞれの波を見つけて浮寝鳥

東京 牧田ひとみ

海一望手話の母子の遍路笠

神奈川 矢沢 寿美

本題を切り出せぬまま蕎麦湯かな

栃木 小林 由典

夕風の魚籠に交じりし鮎の鍔

神奈川 高野 信一

竹秋の風を通せり躊り口

愛知 林 尉江

空を蹴る足の気合や梯子乗

福島 湯田 畊道

守りゆく瑞穂の国や種浸す

鹿児島 谷口千枝子

春の雪母とはいつも待つ役目

宮崎 飯干 久子

こぼれ落つる追憶もあり沈丁花

東京 守住 京子

目が見えて手が動かして毛糸編む

愛知 稲熊 明美

帰省子のひと日の他人行儀かな

千葉 中村 かよ

鳥のこゑ追へば深山の余花と逢ふ

東京 平松 尚樹

花いばら沖は太古の瑠璃の色

沖縄 仲間 文子

浜までの一本道を駆けて夏

広島 中村 文子

おはぐろを弾ませ沼の遊び蔓

静岡 杉澤 修

喉を焼く電気ブランや三鬼の忌

静岡 杉澤 修

村挙げて祝ふ一人の入学児

東京 今田 清三

紙ひかうき海へ飛ばして卒業す

三重 稲垣いつを

裸木となりて怖るるものもなく

兵庫 山田 綾子

中 坪 達 哉 選

岩海苔に残る礁のかけらかな
湯浴みするごとく吉野の花浴ぶる

東京 山本 吉人
大阪 藤田 駒代

仕事もつ子に会ひに行くみどりの日

富山 荒田眞智子

晩夏光本の売れたる隙間かな

富山 荒田眞智子

減便の路線バス待つ文化の日

滋賀 古川 武人

祭馬草食みながら祓はるる

広島 坂本たか子

甘蔗刈に呼ばれしのみのお暇とや

沖縄 宮城 勉

朝涼や宮司出社の下駄の音

奈良 堀上 慶子

炊き出しの匂ふ避難所つばめ来る

石川 枡谷 栄子

窓広きことも食堂つばくらめ

千葉 清水 陽子

通されて振子時計の夏座敷

東京 衣川 洋子

山国の雲の厚さや葉喰

静岡 林 浩世

神域を外れて雨の袋角

千葉 鈴木 禮子

新聞を足して加はる花筵

奈良 小島 元博

不揃ひに揃ひて揺るるミモザの黄

千葉 中村 世都

春の雲窓辺に吊るすフライパン

愛知 吉田 春陽

ピースなんかするな少年原爆忌

神奈川 川島ちえり

七輪に湯の沸いてをり花見茶屋

三重 宇田多香子

畦焼きの煙の隠す道しるべ

愛媛 平岡千代子

谷底に残る洗ひ場花茗荷

神奈川 八木 次郎

中 原 道 夫 選

ふらここのこは私に居る場所
金目鯛ににらまれながら煮てをりぬ
レギュラーを外されし日の雲の峰

山形 五十嵐恒子
東京 平尾 美緒
神奈川 大木 雪香

馬泳ぐやうに来る雪掻き分けて

奈良 緒方 順一

切り口が鋼のひかり備長炭

愛知 尾崎恵美子

植木市値札に端数なかりけり

岡山 杉本征之進

ふくろふが鳴くまでホットウイスキー

岐阜 福井 英敏

消炭を喉け夜話の二つ三つ

北海道 小林 道彦

飛び込みの一身つつむ水の鞘

東京 吉田 祥子

おみあしのごと撫で洗ふ遍路杖

愛知 渡辺美智代

うららかや連れ啼きしたる牧の牛

愛知 渡辺美智代

かな文字に墨の息継ぎ花あかり

茨城 九条 道子

遊び足りたる春泥の靴ならぶ

富山 小嶋トシコ

薄水のなまくらとなり漂へる

鹿児島 池田 貴之

虫追ひの列に加はる野球の子

静岡 杉澤 修

八ツ頭二回まわして刃を入るる

千葉 吉田小夜実

書を曝しいとしきまでの闘病記

神奈川 宮崎登美子

汝が死後の花も四度目よ元氣です

東京 長谷川照子

遠ざかる尾灯にも似て春の逝く

東京 神津 眞久

闇の字の中に音の字虎落笛

岐阜 後藤 和朗

漆黒の初瀬の山のはつあかり

三重 池森はる子

尼寺に飼はれるるかに夏鶯

東京 中尾茉莉子

仲村 青彦 選

西村 和子 選

水が水つかみて滝の凍てにけり

愛媛 穴野 宏治

どこからか子ら湧いてくる春休み

埼玉 黒岩 裕介

ひたすらに流るる川や原爆忌

大阪 田中 清司

永き日や名も無き家事をひとつつつ

岩手 永澤千恵子

両の手で井戸水もらふ桃の里

東京 濱田 ゆふ

白萩のこぼれ耳鳴りまだ止まず

青森 伊藤 蒼風

ぶらんこを漕げば智恵子の青い空

岡山 柴田 奈美

虫売りの屈めば客も屈みけり

神奈川 倉谷 安子

瀬に渡す丸太一本山ざくら

三重 近藤 昶子

思ひきりこゑのぶつかる寒稽古

愛知 柴田 孝江

昼顔に置きある海女の背負子かな

広島 坂本たか子

イヤリング大きく揺らしラムネ飲む

広島 坂本たか子

谷底に生活の道や桐の花

神奈川 門脇 明子

古雛船場ことばの聞えさう

大阪 福本せつこ

竜天に登り火口の湖青し

神奈川 河野 紀生

洛中は拔露地ばかり十三夜

京都 池田 華甲

最果ての花野が包む駅灯り

兵庫 千堂 富子

雛の間にひとまづ通す夜の客

福島 大友 康子

春昼や鏡があれば立ち止まる

神奈川 渡辺 一充

ひらがなの舞ふがごとくにぼたん雪

愛知 井上千保子

目が見えて手が動かさせて毛糸編む

愛知 稲熊 明美

書き出しの未だ浮かばず蜜柑剥く

千葉 谷口 摩耶

鳥雲に解体を待つ巨大ビル

神奈川 菅野トモ子

暮るるには間のありひとり門火焚く

東京 衣川 洋子

シクラメン窓辺明るき保健室

兵庫 長野 順子

額ばかり熱くなりたるとんどの火

神奈川 鈴木 浩子

紙漉の村を貫く冬の川

石川 井端 久子

花冷の夕日とどむる濠の松

宮城 富田 洋子

水打つて一番星を誘ひ出す

埼玉 金子美津子

手を洗ふ水の重さよ花疲れ

埼玉 島貫 恵

自画像に眼の描けぬまま春逝けり

東京 小出 功

げんこつで涙ぬぐひし卒業子

富山 脇坂琉美子

石鹼玉放たれて空ゆらぎけり

島根 足立 歩久

微の家立身出世物語

岐阜 安田 一義

谷底に残る洗ひ場花茗荷

神奈川 八木 次郎

手裏剣の飛んで来さうな木下闇

神奈川 外山観佳子

立ち漕ぎの坂の天辺夏の雲

京都 濱岡 学

八ツ頭二回まわして刃を入るる

東京 城子 康子

昼寝して鳥獣戯画の夢の中

青森 京谷 みき

春雨や音しづかなる男傘

千葉 吉田小夜実

畑の父呼べば草笛応へけり

宮城 藤野 尚之

愛媛 松井 洋子

愛媛 松井 洋子

西山

睦選

野中

亮介選

千本のアキレス腱が山車を引く

夏潮の藍へのびゆく滑走路

百年の傷をいぢらず母の雛

うしろ手に帯を確かむ菊日和

産み月の牛に一匹蠅まどふ

思ひきりこゑのぶつかる寒稽古

洛中は拔露地ばかり十三夜

金魚売金魚の鱗流しけり

窓広きことも食堂つばくらめ

入学や子を東京に取られたる

魴挿すや嫁いだ日から舟にのり

藍染めの手に藍残る盆用意

アッパツバ暮らしの下に活斷層

船ゆくや春帆楼の夕桜

永き日の海へ自転車まつしぐら

手を洗ふ水の重さよ花疲れ

海峡の見ゆる生家や花曇

貝殻はすべてなきがら八月来

百合を買ふもう病むことのなき人へ

この鳥を飛び出す勢ひ半仙戯

週刊誌二冊伏せあり磯竈

牛の健啖山羊の健脚山笑ふ

和歌山 長谷川閑乙

栃木 池上 吟

神奈川 倉谷 安子

広島 坂本たか子

愛知 柴田 孝江

京都 池田 華甲

神奈川 須田 聡子

千葉 清水 陽子

長崎 小谷 一夫

愛知 古賀 理之

秋田 塚本 佐市

神奈川 内田知江子

山口 佐々木みどり

東京 星野 将江

富山 脇坂琉美子

鹿児島 山崎加代子

愛知 石川 裕子

東京 岡根 尚美

神奈川 浅木 ノエ

神奈川 藤川三枝子

奈良 福田えいじ

祭馬草食みながら祓はるる

酔うて買ふ露店のおもちや夏の月

百僧の息百僧の寒念仏

アネモネや朧の恋は捨てず置く

一駅を眠る学生年の暮

虫売りの屈めば客も屈みけり

田回りの青大将を掲げ来る

雪解風家を継ぐ子はまた都会

ぶらんこを漕げば智恵子の青い空

千本のアキレス腱が山車を引く

教室にまだ残りゐる卒業子

春炬燵一人に慣れてしまひたり

引き絞る弓の静けさ花あしび

レギュラーを外されし日の雲の峰

藍染めの手に藍残る盆用意

大津絵の鬼には投げぬ年の豆

船頭が手をかしてゐる春日傘

藩校に遺る書院や竹の秋

寒垢離の水満々と透き通る

播鉢に移るさみどり春惜しむ

夏休み悪だくみには肩を組む

かぎ針の一目をこぼす春の昼

広島 坂本たか子

東京 岩男澄美雄

東京 曾根新五郎

山形 清野佐知子

岡山 西村 泉

神奈川 倉谷 安子

神奈川 倉谷 安子

北海道 佐藤れい子

岡山 柴田 奈美

富山 荒田眞智子

神奈川 土生 依子

愛知 佐藤三千子

神奈川 原 美鈴

神奈川 大木 雪香

秋田 塚本 佐市

和歌山 倉田 信司

神奈川 佐藤 享子

兵庫 山岡仁美子

北海道 岩崎とし恵

宮崎 日高まりも

神奈川 松倉 聖子

三重 金津やよい

能村研三選

日原

傳選

たましひと云ふまんなるものあたたかし

静岡 杉原 明美

投げ出して鯨鰐捌く雪の上

広島 石橋 康徳

水が水つかみて滝の凍てにけり

愛媛 穴野 宏治

この水と生きて半生紙を漉く

島根 吉浦 増

この年のこの場所のこの桜かな

新潟 渡辺 水穂

山車蔵の高き一棟鳥帰る

東京 菊田 一平

百僧の息百僧の寒念仏

東京 曾根新五郎

お産待つ牛舎に光る軒氷柱

北海道 佐藤れい子

残心に朝日の差せる弓始

岡山 杉本征之進

焚き口に団栗まろぶ休み窯

広島 日比野さき枝

火の匂ひ藁の匂ひの年用意

神奈川 倉谷 安子

石炭一片軍艦島の草萌に

愛知 藤本 恭子

海の色うすく重ねて花菜風

千葉 坂本 徹

拭き上げて百年の家雛飾る

山梨 小林みほ子

峻峰を越えて夏雲の脱力

茨城 北浦 残月

通学の道しか知らず卒業す

千葉 塩野谷慎吾

鯖鮎の金剛力を釣り上ぐる

埼玉 佐藤 弘

書き出しの未だ浮かばず蜜柑剥く

千葉 谷口 摩耶

聖歌譜に丸き木もれ日阪神忌

兵庫 島田 由加

梅雨明けや子が踏み洗ふ柔道着

東京 田村登代子

ふらここの軋みて二胡の音色めく

石川 中川 雅雪

遊び足りたる春泥の靴ならぶ

富山 小嶋トシコ

薄氷を碎けば風の尖りだす

京都 加藤 草児

しやぼん玉追ひかけみんな光の子

東京 小池 博美

やはらかく来てやはらかく座し涼し

埼玉 戸部 雷蝶

京都より車掌の代はる日永かな

兵庫 島田 由加

来年も今日ありやあり雛納

岩手 馬場 吉彦

変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ

東京 平尾 美緒

坐すは画家歩むは詩人黄落期

埼玉 金子美津子

玄室に人の声する桜かな

京都 蓮井いく子

月こよひ上澄みに似る笙の音

兵庫 千鳥 由貴

疑問符の多きエッセイ猫の恋

大阪 檜崎美和子

夜の落花鎮めのトロイメライかな

大分 田邊 博充

清明や卵白の泡つんと立ち

千葉 田所 節子

ひらがなのやうな雨足柳の芽

富山 浅尾 京子

卯の花や生家に若き日の書棚

東京 岡根 尚美

風が織る麦の穂波や農を継ぐ

石川 不破 鏡子

月光のとどこかぬところ蟻地獄

東京 岸根 明

ふれあへばいのちの音の蜩かな

愛知 刈屋まさる

幼子のおしやべり何語チューリップ

熊本 園田 夕子

遠ざかる尾灯にも似て春の逝く

東京 神津 眞久

花散りて吉野の月日流れけり

奈良 市村 健夫

さくらさくら空に喝采あるごとし

熊本 加藤いろは

喪の家のさくらふぶきとなりけり

新潟 丘 のぼる

竹の皮脱ぐ節ごとの潤みをり

三重 池森はる子

藤田直子選

藤本美和子選

子に渡す杵の温みや寒の餅
 変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ
 潮騒の島となりけり祭果て
 枇杷の花千手は同じ物持たず
 大阿蘇の微塵となりて土筆摘む
 霧晴れて杉百幹の目覚めかな
 古墳より古墳を望むうらけし
 家系図に敗軍三度いぬふぐり
 合宿の蚊帳吊つてあり体育館
 制服の丈出しきつて卒業す
 鉄棒の高さ三通り雲の峰
 恐竜の名前すらすら入学児
 幼子は幼子を見る花祭
 靴底の石のごつごつ敗戦日
 授乳期のおもたき乳房髪洗ふ
 遊び足りたる春泥の靴ならぶ
 地獄絵のたるんでゐたる日永かな
 声高に一年生の帰宅かな

石川 東 洗陽
 東京 平尾 美緒
 広島 坂本たか子
 岡山 杉本征之進
 愛知 古賀勇理史
 大阪 讓尾三枝子
 京都 池田 華甲
 富山 古小路憲子
 徳島 飯田 醉亥
 東京 谷口 宏子
 千葉 辻 忠樹
 愛媛 野村タカ子
 東京 花土 公子
 東京 小高 正子
 鳥取 岩水 節子
 富山 小嶋トシコ
 京都 平 万紀子
 和歌山 鈴木 憲一
 群馬 木下 涼薫
 東京 鶴巻貴代美
 北海道 袖山 功
 静岡 高島 昭子

猫の仔の名前の決まる夕餉かな
 すこやかな背骨を通す浮袋
 老人の爪よく伸ぶる芒種かな
 百歳の声晴れやかな初電話
 窓広きこども食堂つばくらめ
 麦青む片方に琵琶湖広がりに
 八月の被爆樹の影人の影
 初刷の紐をかけたる少年誌
 京都より車掌の代はる日永かな
 目刺焼く三河七輪取り出だし
 じよつぱりの母の百年花林檎
 敗戦日風に吹かれてをりにけり
 母の忌といふ草餅に与れり
 俯せの尻のさびしき浮いてこい
 結びの地の病葉なれば拾ひもす
 昼寝して鳥獣戯画の夢の中
 どくだみを軒に吊して母白寿
 寄書きの真中は和の字卒業す
 週刊誌二冊伏せあり磯竈
 監督を空に胴上げ卒業す
 一本のつくしを摘んで旅心

埼玉 戸矢 一斗
 神奈川 倉谷 安子
 大阪 瀬野 浩
 秋田 宇佐見レイ子
 千葉 清水 陽子
 兵庫 たなかしらほ
 東京 曾根新五郎
 東京 福田由美子
 兵庫 島田 由加
 大阪 保母 洋子
 岐阜 名和よちゑ
 三重 伊藤 孝子
 神奈川 森岡 正作
 千葉 西山 春文
 千葉 松澤 美鈴
 青森 京谷 みき
 北海道 越田はづき
 大分 矢野 安鎮
 神奈川 藤川三枝子
 岩手 小野寺東子
 大分 亀田多珂子

松尾隆信選

松岡隆子選

早世の妻の遺せし雛かな

東京 古澤 宜友

鶴鳴き交ふや最果ての大落暉
椎の花龍の匂ひと思ひけり

神奈川 奥田 君子
大阪 立川 六珈

一望の紫雲英明りの中に立つ

埼玉 松永 浮堂

秋麗ボニーテールをほどく指

東京 中村 成吾

守宮の子看取りの窓にはりついて

広島 坂本たか子

鏡文字混じる幼の初たより

京都 渡辺 佳子

空を蹴る足の気合や梯子乗

福島 湯田 畊道

弁当の赤い紐解く花菰

東京 齊藤 洋美

うららかやありがとうだけ言へる姉

京都 中村 優江

幼子は幼子を見る花祭

東京 花土 公子

比良比叡ずしりと据ゑて魼を挿す

滋賀 土井 妙子

野辺に鳴く子猫いだけばもう置けず

東京 田村登代子

ぢいちゃんの蜜柑の島と指すデツキ

大阪 大島 幸男

土筆より小さき指が土筆摘む

東京 山岸 嘉春

地獄絵のたるんでゐたる日永かな

京都 平 万紀子

庖丁の切つ先に立つ酢橘の香

東京 森 恒之

逝くときは春さようなら水の星

北海道 木下美余子

永き日のくわりんたう食む夫の音

埼玉 星井千恵子

二歩で鳴きまた二歩で鳴く子猫かな

東京 大岩 真理

夕雲の端の金色鶴帰る

千葉 栗坪 和子

大試験母の力のにぎり飯

静岡 前川 幹子

テレビ消し戦争を消す春炬燵
朝市のありし辺りか能登は雪
レギュラーを外されし日の雲の峰
図書室にバレンタインの日の暮るる
ぶらんこを漕げば智恵子の青い空
葱刻む忘れたきことありし日は
通学の道しか知らず卒業す
秋草を子規忌の空に描きたし
寄書きの真中は和の字卒業す
八月の被爆樹の影人の影
セーターに着替へふだんの夫となる
寒晴や被災テントにカレーの香
青空の映る方へと春の鴨
たんぽぽの絮交番で見失ふ
虫追ひの列に加はる野球の子
母さんの退院の日の春シヨール
日めくりはをとひのまま鳥雲に
週刊誌二冊伏せあり磯籠
行く春や山の匂ひの帽子置く
幾重にも紙に包まれ走り枇杷

静岡 亀澤 淑子
福島 佐藤 和子
神奈川 大木 雪香
長野 岩永はるみ
岡山 柴田 奈美
大阪 高倉 明子
千葉 塩野谷慎吾
静岡 鈴木 慶子
大分 矢野 安鎮
東京 曾根新五郎
富山 脇坂琉美子
茨城 内山 花葉
富山 室井千鶴子
埼玉 波切 虹洋
静岡 杉澤 修
神奈川 西田 啓子
長野 宮澤 薫
神奈川 藤川三枝子
山形 菊地 秀雄
広島 坂本たか子

南

うみを選

三村純也選

寒の海泳ぎ切つたる瞳かな
息たまに言葉となりぬ山桜
この島を飛び出す勢ひ半仙戯
投げ出して鯨鯨捌く雪の上

三重 水谷 洋子
神奈川 折勝 家鴨
神奈川 浅木 ノエ
広島 石橋 康徳

田回りの青大将を掲げ来る
蒸し鮎をあたたためなほ十三夜
夏蚕飼ふ山犬様のお札貼り
滝開き空より水の匂ひ来る
寄席はねて骨正月の町あかり
子規庵の硝子戸越しに小鳥来る
昼顔に置きある海女の背負子かな
開け放つ結納の日の春障子
風光るひとつ窓足す設計図
夫の忌の桜隠しのひと日かな
レギュラーを外されし日の雲の峰
藍染めの手に藍残る盆用意
遊び足りたる春泥の靴ならぶ
十八の一票投じ卒業す
遠足子でてる坊主下げゆけり
布靴の十一センチ青き踏む
真つ黒な運河の他は雪の街

神奈川 倉谷 安子
広島 坂本たか子
岐阜 矢田 邦子
広島 坂本たか子
愛知 日比谷洋子
広島 坂本たか子
広島 坂本たか子
岡山 大塚 功子
宮崎 大爺真理子
埼玉 中村 鈴子
神奈川 大木 雪香
秋田 塚本 佐市
富山 小嶋トシコ
岐阜 島津 美恵
東京 森尻 禮子
奈良 高橋 翠
京都 加藤 草児
兵庫 堀 瞳子
東京 和智 秀子
山口 植野 史理
鹿児島 窪見 れい
京都 徳永 真弓

うしろ手に帯を確かむ菊日和
雛舟胸にしつかと抱きくる
祭馬草食みながら祓はるる
春の旅水平線に本を閉ぢ
触読のふと止まりたる花の昼
パソコンを手に花火師の席につく
春の風サテンのリボン解くやうに
水が水つかみて滝の凍てにけり
恐竜の名前すらすら入学児
島浦の風に力や巢立鳥
遊び足りたる春泥の靴ならぶ
再雇用新社員とは席遠く
薄氷のなまくらとなり漂へる
ふらここを揺らすでもなく不登校
明日葉の今日のひかりを摘み取りぬ
筋肉の輝いているブルかな
はくれんの時に近寄りがたき白
牛の健啖山羊の健脚山笑ふ

神奈川 倉谷 安子
広島 坂本たか子
広島 坂本たか子
埼玉 大畑 光弘
兵庫 出店智恵呼
奈良 堀上 慶子
兵庫 山口 知子
愛媛 穴野 宏治
愛媛 野村タカ子
香川 植田 桂子
富山 小嶋トシコ
宮城 佐藤 べん
鹿児島 池田 貴之
千葉 藤岡 貞夫
埼玉 横田 幸子
島根 足立 歩久
千葉 里見のぞみ
奈良 福田えいじ

朝風の生まれたてなる蝶運ぶ
ギヤチェンジしたる銀輪風光る
黒板に大きく名前新教師
蝌蚪泳ぐ休耕田の水たまり
霞草足して花瓶の向き決まる

神奈川 倉谷 安子
広島 坂本たか子
岐阜 矢田 邦子
広島 坂本たか子
愛知 日比谷洋子
広島 坂本たか子
広島 坂本たか子
岡山 大塚 功子
宮崎 大爺真理子
埼玉 中村 鈴子
神奈川 大木 雪香
秋田 塚本 佐市
富山 小嶋トシコ
岐阜 島津 美恵
東京 森尻 禮子
奈良 高橋 翠
京都 加藤 草児
兵庫 堀 瞳子
東京 和智 秀子
山口 植野 史理
鹿児島 窪見 れい
京都 徳永 真弓

村上

喜代子 選

森田

純一郎 選

犀の角ほどの春筍もらひけり
あたたかし大小のある半分こ

千葉 原 瞳子
大阪 宮川 育子

花行脚西行塚に果てにけり

奈良 鈴木 玲子

花びらを呼び寄せてゐる浮子ひとつ
ひとつつづ燃やしてゐたり朴落葉

神奈川 河角 京子
神奈川 倉谷 安子

お産待つ牛舎に光る軒氷柱
投げ出して鮫鱈捌く雪の上

北海道 佐藤れい子
広島 石橋 康徳

慰霊碑の裏にあまたの蟬の穴
島人に広き空あり花南瓜

広島 坂本たか子
広島 坂本たか子

守宮の子看取りの窓にはりついて
思ひきりこゑのぶつかる寒稽古

広島 坂本たか子
愛知 柴田 孝江

晩夏光本の売れたる隙間かな
挙手の子の前のめりなる五月かな

富山 荒田眞智子
東京 吉田 祥子

寒鰯の豊漁に沸く地震の町
古雛船場ことばの聞えさう

富山 四宮 一子
大阪 福本せつこ

百歳まで生きるつもりの大朝寝
触読のふと止まりたる花の昼

広島 有田 幸恵
兵庫 出店智恵呼

朝市のありし辺りか能登は雪
泥靴の立ち替りくる種物屋

福島 佐藤 和子
富山 杉本 恵子

花野行く百名山の百番目
鉄棒の高さ三通り雲の峰

奈良 堀上 慶子
千葉 辻 忠樹

春炬燵一人に慣れてしまひたり
田楽の香に一合の酒を待つ

愛知 佐藤三千子
福島 湯田 畊道

山国の雲の厚さや葉喰
空爆の国と青虫つぶす吾と

静岡 林 浩世
島根 河合のぼる

暮るるには間のありひとり門火焚く
稲架けて砦のごとき棚田かな

東京 衣川 洋子
広島 小倉 豈煩

春風やハープにめくるめく十指
ふらここを揺らすでもなく不登校

東京 猪俣 ま悠
千葉 藤岡 貞夫

むつ飛んで有明海の狭くなる
名を呼ばれ梅の中より応へけり

京都 加藤 草児
愛知 佐合たけし

食卓を窓辺へ寄せて蝶の昼
取り壊す家と語りて端居かな

愛知 近藤 京子
東京 大岩 真理

黙々と雪搔く人になほの雪
大海に映ゆる落日雁供養

神奈川 下村 修
神奈川 大高 芳子

春寒や子規の仰ぎし空の幅
新樹の夜独りの箸を洗ひをり

東京 相川 幸代
大分 有宗 眞弓

花吹雪一両電車ゆつくりと
漆黒の初瀬の山のはつあかり

島根 大庭 安代
三重 池森はる子

俯せの尻のさびしき浮いてこい
一山の傾くごとし蟬時雨

千葉 西山 春文
岐阜 小林 真木

角打へ女が走る白雨かな
花筏集めて木場の貯木場

大阪 西田 洋
東京 高山 檀

一本のつくしを摘んで旅心

大分 亀田多珂子

花筏集めて木場の貯木場

東京 高山 檀

虫出しの雷に降り立つ家郷かな
 横澤 放川 選
 富山 中坪 達哉

先生の柩にかける花衣
 投げ出して鯨鯨捌く雪の上
 なまはげの牙つけ直し鬼生まる
 火の匂ひ藁の匂ひの年用意
 建具師の肘よく動く十二月
 高知 亀井しげみ
 広島 石橋 康徳
 宮城 藤野 尚之
 神奈川 倉谷 安子
 山口 三浦 宣子

畳屋の広き門口風光る
 義士祭や郷土の誇り数右衛門
 かかかかと風引き摺つて子が走る
 おみあしのごと撫で洗ふ遍路杖
 動くもの動かざるもの蝌蚪の紐
 机摺る大地を奮ひ立たせては
 夫の忌の桜隠しのひと日かな
 眠る児を抱き風船を持て余す
 早苗田の雲を踏み踏み補植かな
 万人のそして一人のさくらかな
 門柱に残るはてりや盆の月
 二歩で鳴きまた二歩で鳴く子猫かな
 橋の名はみんなひらがな揚雲雀
 牛の健啖山羊の健脚山笑ふ
 湿らせて使ふ黒文字利休の忌
 三重 近藤 昶子
 大阪 岩本 正捷
 大分 小松 生長
 愛知 渡辺美智代
 岡山 杉本征之進
 神奈川 こしだまほ
 埼玉 中村 鈴子
 大阪 村井津哉子
 宮城 小林 宏基
 埼玉 太田佐代子
 静岡 関口喜代子
 東京 大岩 真理
 広島 黒宮 茂樹
 奈良 福田えいじ
 東京 高山 檀



●選考経過

全国俳句大会委員長

小島

健

公益社団法人俳人協会主催、朝日新聞社後援の全国俳句大会は、今年第64回を迎えました。応募数は昨年より約137句多い11,322句でした。この全作品は次の選者によって予選を行いました。

上田日差し・坂本宮尾・佐怒賀直美・しなだしん

鈴木太郎・高田正子・西山 睦・村上喜代子（50音順）

予選は全作品を二名以上の予選選者が眼を通すようにしました。その結果、予選通過数は昨年より310句少ない1,640句でした。（応募句の14.5%）

予選通過作品はこれを無記名でプリントし、その中から四十一名の本選選者に各々特選三句及び入選二十句を選んでいただきました。

各選者の特選句を二点、入選句を一点として集計した結果を、

大串 章・片山由美子・小島 健・西村和子・能村研三（50音順）

の五名による選考委員会で審議を行い、高点句の中から大会賞を六句、秀逸賞を十句と致しました。選考の過程や選考後に作者に確認の結果、類句や既発表句等であることが判明した作品は、応募要領に従い入選を取り消し、該当箇所は空欄にしております。

ご応募いただいた皆様にお礼を申し上げますと共に、今後のご健吟を期待致します。

また、選考に当たられた諸先生方に感謝申し上げます、ご報告と致します。

予選通過作品集

北海道

- 1 サロベツへ掛け替ふる橋花萱草
- 2 遠雷や肉切り包丁手に重く
- 3 雪解風家を継ぐ子はまだ都会
- 4 お産待つ牛舎に光る軒氷柱
- 5 雪達磨作りて吾子は反抗期
- 6 消炭を噓け夜話の二つ三つ
- 7 病棟の子の窓明かり月おぼろ
- 8 補聴器の電池の寿命囀れり
- 9 校庭の新雪子らが皴くちやに
- 10 神木と呼ばれ千年木の根明く

- | | | | | | | | | |
|------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 平 京子 | 下 山 春陽 | 佐藤れい子 | 谷 野 松枝 | 小林 道彦 | 高山 京子 | 沼田 泥舟 | 山内 元子 | 市川 節子 |
|------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|

- | | |
|---------------------|-------|
| 11 冬の海かもめの白さしたたれり | 伊藤 偕幸 |
| 12 春宵や猫の化粧のしなやかに | 辰巳奈優美 |
| 13 寒立馬雲雀のこゑに首もたげ | 池野やまべ |
| 14 太陽の放つ芳香朴の花 | 遠藤 孝明 |
| 15 一夜さの風の連れ来し流水期 | 大森 陽香 |
| 16 吹雪く夜や子と読むシートン動物記 | 中西 史子 |
| 17 溜池の浅みびしびし蝌蚪生まる | 鶴岡 正子 |
| 18 極寒やバキリと音の折れ曲がる | 加藤 一実 |
| 19 花種の音なきものを風に蒔く | 青木まゆ美 |
| 20 逝くときは春さようなら水の星 | 木下美余子 |
| 21 母とつみ子とつみ一人摘む土筆 | 大谷 博光 |
| 22 散る前の牡丹を描いて児がくれぬ | 土佐美々子 |
| 23 春節の一行躲して通勤す | 古川 和 |
| 24 あめんぼう乗せて水面の柔らかし | 袖山 功 |
| 25 草の花馬頭碑石に還りつつ | 岩崎とし恵 |
| 26 防風咲く訪はねば遠くなる故郷 | 越田はづき |
| 27 寒垢離の水満々と透き通る | 成田 智子 |
| 28 海峡の荒波に春乗り切れず | 佐々木克子 |
| 29 どくだみを軒に吊して母白寿 | |
| 30 補助輪を外す自転車ふきのたう | |
| 31 電柱に雪ふきつけて吹雪止む | |

青森県

1	白萩のこぼれ耳鳴りまだ止まず	伊藤 蒼風
2	なで牛をなづるも日課黄砂ふる	村田加寿子
3	駅舎なき駅より通ひ卒業す	小川ひとし
4	子雀や畦道匂ふ雨上がり	佐藤いく子
5	甲田嶺の銀の頂種選び	鈴木 莉花
6	雛祭生まれなかつた二十二歳	長内 タキ
7	ふるさとに今も暮らして衣替ふ	郡川 宏一
8	自然薯の紆余曲折といふ形	佐藤 幸子
9	そのむかし天女が落ちて螢鳥賊	五十嵐かつ
10	重ね着しマトリョーシカになる老婆	萬年 和子
11	春愁や少し注ぎ足す赤ワイン	鈴木ゆき子
12	小気味よく切れる包丁花菜飯	宮内 香宝
13	昼寝して鳥獣戯画の夢の中	京谷 みき
14	息継ぎのまだとのはぬ初音かな	鈴木志美恵
15	古草の絡まる鶏の蹴爪かな	今 順子
16	春シヨール気取つてみても十二才	々
17	火の番を終へ車座の消防団	田端 千鼓

岩手県

1	銅の踏絵の地肌輝きぬ	小山 尚宏
2	斜に担ぎ社殿に突つ込む荒梵天	永井 雍子
3	教へ子の中に吾子の名つくつくし	及川ふき子
4	額ばかり熱くなりたるどんどの火	工藤 陽子
5	こゑ出して笑ふ演目小正月	千葉 廣子
6	鳴き声に負けて子猫を拾ひけり	郡司 山吹
7	来年も今日ありやあり雛納	馬場 吉彦
8	茅葺きの山門くぐり初蝶来	内藤 麻子
9	山菜莢の花にひかれて後戻り	鉄本 正人
10	冷蔵庫より取り出だす化粧水	大平 春子
11	揺れやうはフラダンスめくゼリーかな	々
12	月涼しお狐面の子等とほる	篠村恵美子
13	カーテンの揺らぎ冬日のひとかけら	大原 宏司
14	永き日や名も無き家事をひとつづつ	永澤千恵子
15	監督を空に胴上げ卒業す	小野寺東子

宮城県

1 蓮見船背高き花にそひ止まる

藤野 尚之

2 アマハゲの遊佐の野山へ吠えにけり
 3 なまはげの牙つけ直し鬼生まる
 4 雪の日の祖谷の大ぼけ小ぼけかな
 5 野にあれば野の色となり寒雀
 6 見せる日記見せない日記亀鳴けり
 7 帯の幅ほどの道なり山桜
 8 海の日や被災の町のモアイ像
 9 注連縄の二十五本を納めけり
 10 母の日や妣の小言を聞きたき夜
 11 虫時雨ベンチも遊具も草の中
 12 駅中の本屋閉店二月尽
 13 退院の鏡の前の春セーター
 14 閉校の庭に残りし鴉の巢
 15 接岸の巨船の転舵陽炎へり
 16 前方へ足のもつるる堂狩
 17 雪解田は光の湖よ峡日和
 18 磯船を打てる怒濤や鑑真忌
 19 迎へ火は母送り火は父のため
 20 春泥を避けて一步の初出社
 21 白鳥の水嵩を増すほどの数
 22 掲示板に火の用心や鳥雲に
 23 再雇用新社員とは席遠く
 24 駒返る草や読み合ふ寮歌の碑
 25 早苗田の雲を踏み踏み補植かな

藤野 尚之
 〃
 〃
 玉井 瑛子
 〃
 〃
 松村 正
 石川 征一
 鈴木 裕子
 木下よしえ
 松谷 直美
 高木 秀子
 柏木ともみ
 〃
 吉田 博子
 〃
 〃
 仁平よしあき
 狩野 甲七
 石森千賀子
 江戸 裕子
 佐藤 べん
 富田 洋子
 小林 宏基

26 名札下ぐ研修生や花の宴
 27 旅の鞆ぬらす上野の春の雪
 28 上京の肩にギターや新人生
 29 海暮れて白梅ほのと残りけり
 30 初蝶来海抜二メートルの地に
 31 笹子鳴く硯切り出すこの山に
 32 海苔あぶる母の仕草のしなやかに
 33 枯山に吸ひ込まれゆく夕日かな
 34 菊炭の白く崩るる夜更けかな
 35 小流れを時には跳んで春惜しむ
 36 畑の父呼べば草笛応へけり
 37 肌脱の父の胸板たたきけり

秋田県

佐野 享保
 高宮 義治
 〃
 松島あきら
 坂内 佳禰
 〃
 幾世橋 廣
 〃
 富士原志奈
 小林 雅子
 藤野 尚之
 〃
 二藤 誠祥
 宇佐見レイ子
 神成 石男
 斎藤 淳子
 塚本 佐市
 中村 榮一
 田村 陽子

山形県

- 1 アネモネや卒寿の恋は捨てず置く
- 2 春光や茂吉の墓碑は山あふぐ
- 3 燕来る翼なき者手を広ぐ
- 4 ふらここのこは私に戻る場所
- 5 唐草の風呂敷包み草の餅
- 6 仏像のなべて福耳養花天
- 7 老犬を乗せて少年櫓を曳く
- 8 行く春や山の匂ひの帽子置く
- 9 苗札の角の小さき指のあと
- 10 春風や神官を待つ地鎮祭
- 11 月山の風に乗り継ぎ鳥帰る
- 12 花曇最期の叔父も逝きにけり

清野佐知子
猪俣 洋子
佐藤権一郎
五十嵐恒子
小野 誠一
伊藤 厚子
原田 みる
菊地 秀雄
鈴木 あい
鈴木 正子
大乗寺順子

福島県

- 1 雪を恋ひ雪を疎みて生きし父
- 2 雛の間にひとまづ通す夜の客
- 3 朝市のありし辺りか能登は雪
- 4 空を蹴る足の気合や梯子乗

野中 憲子
大友 康子
佐藤 和子
湯田 畊道

- 5 処理水を押し返したる春怒濤
- 6 暖かや指に吸ひつく錦鯉
- 7 時雨斜めに街燈に照らされて
- 8 茅葺の屋根に立ちたる雪解靄
- 9 田楽の香に一合の酒を待つ
- 10 秋燕無疵の空を残しゆく
- 11 柚子風呂や言葉のやうに香りけり
- 12 骨密度の折れ線グラフ蠶ぐもり
- 13 供花の上に供花の幾重に浜籠
- 14 啓蟄や素手にて攫むお礼肥
- 15 ぐづる子を抱へるやうに布団干す

湯田 畊道
〃
〃
〃
〃
江田 実蝶
小泉 展子
宗像眞知子
吉原 瑞雲
齋藤美都里

茨城県

- 1 骨折の母と聖夜を過ごしけり
- 2 河岸跡に残る米蔵猫柳
- 3 初雪や少しはなれてわが家見る
- 4 太陽をクリックしたし冬の朝
- 5 春愁や円空仏の肩に煤
- 6 百年の松に聖夜の金モール
- 7 百本の椿が咲いて鳥の庭
- 8 煉瓦舎に眠るワインや花の昼
- 9 初つばめ本家分家のゆるぎなく

平野 悦子
飛田 伸夫
菊池 珠枝
黒木 成剛
谷津 和子
岡澤 田鶴
坂上 博
小山 千里
谷村 安子

10 かな文字に墨の息継ぎ花あかり
 11 夜ざくらや抱へてやわき母の腕
 12 時の日のいまだ時告ぐ子供部屋
 13 振袖のふるさと訛初詣
 14 梅園を出でて俗世の人となる
 15 緑蔭を成すきられても伐られても
 16 ピーマンの収穫一トン三尺寝
 17 夕闇や老を打ちゆく花吹雪
 18 大寒の温めて垂らすオリブ油
 19 峻峰を越えて夏雲の脱力
 20 青鷺の脚をそろりと抜くまあひ
 21 寒晴や被災テントにカレーの香
 22 面頬を脱ぎ両眼の汗拭ふ
 23 足跡に溜まる花びら鋤き込めり

九条 道子
 〃
 海老沢静夫
 狩野 勝吉
 〃
 坂本ふく子
 山上ふみ子
 沢井 如伽
 北浦 残月
 〃
 菊池三三夫
 内山 花葉
 清水 仙里
 内山 花葉

7 眠り継ぐ母に八十八夜来ぬ
 8 稽古せし舞を父母へと春障子
 9 手を焼きし児を抱きしめて卒業歌
 10 一切を忘れ囀るものの中
 11 山桜終の一戸へ咲きにけり
 12 竹箴のすべる手織機里桜
 13 百年の傷をいぢらず母の雛
 14 開拓の記念樹太く花吹雪
 15 ふるさは雨に鎮り遅桜
 16 側転の子よ野遊びの輪を外れ
 17 太公望に少年混じる桜時
 18 亀鳴くと指輪抜きたる凹みかな
 19 霜柱土より出でて透きとほる

川匂 幸子
 橋本由紀子
 〃
 福嶋 紀子
 野乃かさね
 売野 緑
 池上 吟
 久保 澄子
 緑川 啓子
 岡田 幸子
 芝宮留美子
 増田 幸子
 星 揚子

栃木県

1 初夢の声なき言葉あふれけり
 2 鯉寄れば波紋に光る蘆の角
 3 こもれ日をさらりと流す日傘かな
 4 せせらぎは春の心音翁道
 5 本題を切り出せぬまま蕎麦湯かな
 6 拔道に昭和の名残り秋の空

三橋 順子
 石井 東京
 植木 英雄
 細井 寿子
 小林 由典
 〃

1 百歳の叔父の銃創八月来
 2 火の神と夜の神契るどんな
 3 山笑ふ円空仏の削り痕
 4 草笛や少年の吾に会ひにゆく
 5 パンジーの日をみつみつと溜めにけり

桐野 梅子
 木下 涼薫
 原 光生
 木下 涼薫
 今井 ゆき

群馬県

埼玉県

1	豪雪の杉大木の弥彦かな	矢島 清	25	木の根明く土偶の臀部ふつくらと	高嶋 静
2	礫山の「女」見つめる新樹光	神沢 英雄	26	糸通すこともりハビリ青嵐	今井喜久江
3	八十路来て今も戦後や草のもち	古郡 孝之	27	駆け出して地球を蹴つて鳥帰る	折原ゆふな
4	一望の紫雲英明りの中に立つ	松永 浮堂	28	桜薬ふる父さんの家終ひます	小林 久子
5	リラ冷の水は秘色を極めけり	〃	29	残雪の鳥海山や風うまし	椎名佐和子
6	獅子舞や祝儀返しに孫を噛み	浅見 秀溪	30	地の底に遺跡掘る人遠郭公	〃
7	笠雲の一角を裂く稲光	中澤 泰三	31	記念日に下ろす真白き春セーター	島貫 恵
8	一札に始まり終る夏の空	松本きみ枝	32	グラウンドも空も平らか蝶生まる	〃
9	手の甲に頬紅試す二月かな	長 正子	33	ふらこを降りて翼を仕舞ひけり	鈴木 恭子
10	経糸緯糸布に成り行く日永かな	須田 真弓	34	できることやらねばならぬ芋を植う	斉藤 君江
11	帰省子の先づ鍵盤に向かひけり	佐藤 弘	35	鴨の陣広がり朝の雨上がる	野坂 潭
12	露涼し魚籠を枕に旅寝かな	〃	36	間伐の木を選びゆく雪解山	〃
13	花明り上野大仏お顔のみ	小宮 和代	37	花冷や素手に転がす和蠟燭	神野 昭子
14	校倉の錠の錆びいる花曇り	加藤 誠	38	夫の忌の桜隠しのひと日かな	中村 鈴子
15	入学児練習船に驚きぬ	角 達朗	39	新しき椅子の弾力春を待つ	町田美枝子
16	菜の花や沖ゆく船に大漁旗	淡 青	40	糸ざくら地に不即不離六百年	首藤 眞一
17	自画像へ添ふるひとふで夏書かな	栗原日和田	41	母の忌やいつもの店の桜餅	木下 洋子
18	子の指の先にくつつく芋の露	小川 悦子	42	こころあれば水は優しく紙漉女	西田せん六
19	残照の色より深し烏瓜	山口 昌志	43	あたたかや小寺に鼻紙朱印状	荒川 清司
20	妹の笑ひ上戸のしやぼん玉	松居 舞	44	菜殻火の煙のなびく母郷かな	伊藤 柳香

45	開け放つ壁にはためく津輕風	大橋 松枝	69	明日葉の今日のひかりを摘み取りぬ	横田 幸子
46	老い知らずの婆の十指や毛糸編む	玉田 和代	70	たんぽぽの絮交番で見失ふ	波切 虹洋
47	弥生尽掬うて零す星の砂	山下由理子	71	落花して一と塊の吹き溜り	佐藤 桂子
48	少年の魚籠の空つば青芒	福田 啓一	72	冬怒濤地曳漁師の法螺話	鶴飼 広計
49	名画座の故人と逢へりあたたかし	〃	73	網棚に帽子ふはりと夏来る	小俣恵美子
50	春愁ならび歩きし人のこと	宮本 豊子	74	噛み合はぬ妻との会話衣被	永岡 好友
51	日を紡ぎ五月の水の奔りけり	〃	75	ものの芽や少年達の目に鋭気	箕輪 花凜
52	二歩戻り玉虫拾ふ佳き日かな	武藤 三山	76	永き日のくわりんたう食む夫の音	星井千恵子
53	春泥の靴の散らばる書道塾	柳堀 悦子	77	騙し絵のやうに船ゆく春の海	島貫 恵
54	百寿へと詩心の一日蜆汁	半田 卓郎	78	母の物纏ひて過ぐす三ヶ日	宮本 淑子
55	西行忌谷の流れに口濯ぎ	伊藤 恭子	79	一山は七堂伽藍花の雲	鈴木すぐる
56	鯖鮎の金剛力を釣り上ぐる	佐藤 弘	80	猫の仔の名前の決まる夕餉かな	戸矢 一斗
57	花冷の夕日とどむる濠の松	島貫 恵	81	調律の一音づつや初つばめ	小林 筑山
58	白鳥のしろの褪せれば愛されず	三浦 恭	82	薬屋根の朽つるままなる花明り	今井 俊
59	成人の日のラジオより愛の歌	田辺 厚子	83	刺股を拭く銀行の仕事始	金子 慶子
60	万人のそして一人のさくらかな	太田佐代子	84	硯海に乾ぶ青墨実朝忌	真尾 公子
61	やはらかく来てやはらかく座し涼し	戸部 雷蝶	85	理髪師と鏡の中の風信子	吉田 孝子
62	連弾の呼吸の合はぬ残暑かな	田部 恭子	86	薄氷に空の揺れある新任地	〃
63	坐すは画家歩むは詩人黄落期	金子美津子	87	どこからか子ら湧いてくる春休み	黒岩 裕介
64	水打つて一番星を誘ひ出す	〃	88	父の背がやけに大きい春夕焼	高原 沙羅
65	駅舎なき無人のホーム青田風	新原 健	89	桜鯛八十路なれども未来あり	小田原やちよ
66	小晦日厨に強火弱火かな	折原れつ子	90	眼裏へ並べてゆきぬ落椿	江口あをね
67	肩車花盗人の小さき手	内藤 明	91	あんぱんの皮のふくらみ四月来る	望月ちず子
68	秋風や外湯めぐりの男下駄	久我 寿幸			

千葉 県

1 佐保姫や返る筈のやはらかき
 2 いにしへの埴師思へり総浅春
 3 学校の渡り廊下へ日脚伸ぶ
 4 路地ひとつ違へて京の旅はじめ
 5 冬惜しむとろみの強きものを食べ
 6 カーネーション今でも赤き花を買ふ
 7 獺犬の向きあつてゐる鳥の恋
 8 山頭火読みし後より黍の風
 9 五箇山の月にさすらふ雪女
 10 卵ほどの矢りあるべし敬老日
 11 対岸の青きを踏みに渡舟ゆく
 12 半仙戯湖も立木もひるがへる
 13 鑑真の眼窩のくぼみ鴟猛る
 14 畑仕事入道雲を背負ひつつ
 15 海の色うすく重ねて花菜風
 16 たんぼの群生鉄条網の中
 17 流水の軋みは死者の噎びかな
 18 若鮎の流れを弾く力かな
 19 灯台の白き孤独や晩夏光
 20 夕焼の朱によどみなし寒九かな

町山 公孝
 椿 和枝
 鶴見 秀昭
 滝口美智子
 原田 香伯
 馬場 慶子
 甲州 千草
 鈴木 和子
 葛西 茂美
 針田 達行
 鎌田 光恵
 島崎 桜湖
 山田 昌美
 坂本 徹
 川又 和子
 三好 弘國
 榎本聖游子
 田上 正志

21 寺の名を忘れミモザは忘れざる
 22 鶏二羽にちやうどよき庭更紗木瓜
 23 まだ誰も踏まぬ砂浜風光る
 24 口べたの話上手や四月馬鹿
 25 通学の道しか知らず卒業す
 26 木も草も枯れきつて星無尺蔵
 27 書き出しの未だ浮かばず蜜柑剥く
 28 人類に哀歌千編涅槃西風
 29 窓広きこども食堂つばくらめ
 30 鷹一羽あをきにあをき安房の海
 31 狂ほしき濤の音聴く真砂女の忌
 32 そしてまた風に遊べる猫じやらし
 33 鉄棒の高さ三通り雲の峰
 34 鯉幟文殊菩薩の風の中
 35 人の世の遠くなりたる花の下
 36 針箱に指貫三つ山笑ふ
 37 残る鴨心決めたる深眠り
 38 婦省子のひと日の他人行儀かな
 39 鳥籠にもどらぬ小鳥暮の春
 40 赤ん坊の喃語に落花頻りなり
 41 ゴム風船人を離れて人の中
 42 犀の角ほどの春筍もらひけり
 43 シリウスや君が手書きの巡礼記
 44 神域を外れて雨の袋角

田上 正志
 滝口美智子
 井本とき子
 塩野谷慎吾
 千葉 信子
 谷口 摩耶
 本池美佐子
 清水 陽子
 小林 良作
 戸田 一雄
 藤井 瑞代
 辻 忠樹
 祐 森司
 小俣たか子
 鈴木 和子
 中村 かよ
 山口ひろよ
 鷺頭シズ子
 原 瞳子
 鈴木 禮子
 田上 正志

45	糸ざくら少女はしなる指を持ち	木村麻利子	69	源流はこの谿の奥鳥帰る	森崎 森平
46	日焼して早慶戦に声を張る	山本よう子	70	春泥を老いらくも又跳んで恋	上田 玲子
47	簪守花守ともに話好き	〃	71	拾得は箒にもたれ蒙古風	荒木 甫
48	昇進の婿よ娘よ清明よ	〃	72	をのこらは模型に夢中雲の峰	松井 伸子
49	灯虫採る大篝火を宵の寺	後藤珠祥子	73	数へ日の蕎麦湯にすこし柚七味	吉野まつ美
50	寮の子等いろづく菜莢を見のがさず	〃	74	俯せの尻のさびしき浮いてこい	西山 春文
51	鳥帰る北は亡父の虜囚の地	藤埜まさ志	75	覚えなき肘の青あざ若葉風	逆井 花鏡
52	不揃ひに揃ひて揺るるミモザの黄	中村 世都	76	結びの地の病葉なれば拾ひもす	松澤 美鈴
53	我も亦過客のひとり春惜しむ	大久保文夫	77	膝の上のハンカチ春の日の重さ	飯生 里美
54	ふらここを揺らすでもなく不登校	藤岡 貞夫	78	水彩の筆致輕妙風光る	中津 麻美
55	若草やスケッチブックに空いつばい	井口さえ子	79	長き夜や体温計に窓ひとつ	梅津 紀子
56	八ツ頭二回まわして刃を入るる	吉田小夜実	80	花冷やいくつ踏みたる人の影	島木 翠
57	雨粒を湛へ烟れる八重桜	細川 洋子	81	眼鏡ふく雪降る街を帰り来て	三代川玲子
58	囀や耳朶ふくよかに父ゆづり	小原 千秋	82	凸凹の影を平らに石涼し	高橋 道子
59	沖はるか白波の立ち朝桜	鈴木久美子	83	一日の長さまちまちたんぽぽ野	米川喜美代
60	春愁や高足蟹の長さ足	萩原 敏子	84	青空に穴の開きさう揚雲雀	荒井ハルエ
61	清明や卵白の泡つんと立ち	田所 節子	東京 都		
62	春風や泣く子も笑ふアンパンマン	浦 卓夫			
63	補聴器をはずし夜寒の世を遠く	石崎 章子			
64	図書館に座す目札の涼しさよ	山田 和子			
65	天領に残る税や風光る	原 瞳子			
66	夕雲の端の金色鶴帰る	栗坪 和子	1	帰り花ひとつは白き母の遺書	曾根新五郎
67	はくれんの時に近寄りがたき白	里見のぞみ	2	百僧の息百僧の寒念仏	〃
68	麻酔覚め細胞始動木の芽時	西村 将昭	3	ペースメーカーの鼓動勤労感謝の日	〃
			4	星飛べる瞬間ハモニカを口に当つ	後藤知朝子

5 一宿の宿へ一礼遍路発つ
 6 死者生者笑ひ合ひをり初写真
 7 狭の星集ひてきしむ御神渡り
 8 万緑や那由他の時の渦巻ける
 9 河童忌や坂の途中の路地も坂
 10 遣されし本に某の紙雛
 11 猫と老い仮寝の夢に春炬燵
 12 面とれば人といふ鬼鬼やらひ
 13 万緑の訛あふるる舟下り
 14 秋麗ボニーテールをほどく指
 15 稲妻や波に揉まるる船溜
 16 夕顔や市の外れの鬼子母神
 17 都へと続く鉄路や春の月
 18 さくらさくら桜の見えぬ無菌室
 19 聖書閉づ壺いっぱいに赤まんま
 20 誰にでもありて晩年桃の花
 21 早世の妻の遣せし雛かな
 22 街の灯を朝の消しゆく雨水かな
 23 裏山は巨き暗闇墓
 24 盆梅の二輪開くや猫遊ぶ
 25 寒椿活けて亡き子の誕生日
 26 愚痴法然愚禪親鸞万愚節
 27 また一つ忌日を加へ二月逝く
 28 飛び込みの一身つつむ水の鞘

清水ひとみ
 岡本 輝王
 菅原 悟
 三浦 美苗
 野上 卓
 石井 きさ
 西川 芳子
 曽根新五郎
 佐藤 祐佑
 中村 成吾
 渡邊 顯
 ♪
 座間 英幸
 悠 子
 安田 葉子
 草野 佳子
 古澤 宜友
 加藤 完司
 松野 秀雄
 久保田敏子
 河崎 朝子
 和田 秀穂
 下谷内綾子
 吉田 祥子

29 挙手の子の前のめりなる五月かな
 30 帯解きの双児の笑みに声かけぬ
 31 枝先のはつかな翳り蝶の昼
 32 ページ繰る鬼の捨子のそばにゐて
 33 「転生」といふ香水をつけてみる
 34 冬ぬくし乳鋌ふくらむ大手門
 35 武蔵野の星を数ふる三ヶ日
 36 国境も旅券も無き空鳥帰る
 37 カフェオレを少し甘めに春を待つ
 38 綿虫やいのちは誰の贈りもの
 39 バレンタイン「愛こそすべて」鼻歌で
 40 春寒や魔除けの獣の足太し
 41 こころ研ぐ砥石に寒の水垂らし
 42 大店の盛塩清し朝桜
 43 食む音の夜を刻みゆく春蚕かな
 44 大の字の残りたるまま山笑ふ
 45 五歳児の手に冬蝶の眠りをり
 46 古着屋に森のしつけさクリスマス
 47 畑中の手押し車や鳥雲に
 48 手のぬくみ伝はらぬやう土筆摘む
 49 つちふるや飛来するもの皆怖し
 50 舟唄の声の底なる雪解かな
 51 残照や無蓋駅へと刈田道
 52 ぼつぺんを吹くや応へは玻璃の中

吉田 祥子
 千田 節子
 古館 泰子
 島田 一郎
 弾塚 直子
 江川 和彦
 町田 珠子
 三井千賀子
 ♪
 ♪
 ♪
 小瀬 寿恵
 小野田去水
 生山 裕子
 高橋 透水
 衣川 洋子
 近藤 精一
 矢野みはる
 菅家 瑞正
 望月 澄子
 水野尾かつし
 坂本 昭子
 大岡吉一郎
 清水 葉子

53	こぼれ落つる追憶もあり沈丁花	守住 京子
54	飛驒牛肉貰うて子を待つ二日かな	乙幡千枝実
55	ほの甘き麩菓子之母へ春隣	〃
56	制服の丈出しきつて卒業す	谷口 宏子
57	職辞して日比谷公園夕桜	小山 博子
58	弁当の赤い紐解く花筵	斉藤 洋美
59	暮るるには間のありひとり門火焚く	衣川 洋子
60	通されて振子時計の夏座敷	〃
61	ふる里の雨の中なる桜かな	岡田みさ子
62	人消えて落葉の森となりにけり	太田 裕子
63	幼子は幼子を見る花祭	花土 公子
64	テラス席角にミモザと猫の水	平松うさぎ
65	梅雨明けや子が踏み洗ふ柔道着	田村登代子
66	野辺に鳴く子猫いだけばもう置けず	〃
67	魚氷に登る雲梯に日の近し	小橋 信子
68	ささらぎの筑波嶺にただ風ばかり	広海あぐり
69	頼りなき手書きの地図や山笑ふ	小倉 陶女
70	黄落や踵浮かせてサキソフォン	志磨 泉
71	靴底の石のごつごつ敗戦日	小高 正子
72	おだやかな風の岬や野萱草	野島乃里子
73	土筆より小さき指が土筆摘む	山岸 嘉春
74	岩海苔に残る礁のかげらかな	山本 吉人
75	木偶遣ひ笑へば木偶も初笑ひ	宮本あき子
76	風吹けば鈴で応ふる花馬酔木	柊津あきら
77	花の雨奥千本を残しけり	柊津あきら
78	桃の花記憶の中の肩ぐるま	花澤ちいこ
79	しゃぼん玉追ひかけみんな光の子	小池 博美
80	「この道が好き」たんぽぽの咲く朝	竹本 悠
81	若葉風孕みて沖へ帆帆帆帆帆	平松 尚樹
82	鳥のこゑ追へば深山の余花と逢ふ	〃
83	木枯や汽笛の響く夜の講座	松山真佐子
84	ゲラ留める目玉クリップ寒燈下	木嶋 純子
85	紋付の母さけてゐる卒業子	堀井より子
86	遠足子てゐる坊主下げゆけり	森尻 禮子
87	森林鉄道に乗つて木曾の子入学す	田沢健次郎
88	冬薔薇大病越えて髪染めて	鈴木公巳子
89	急患のへりを見送る島の秋	曾根新五郎
90	磯の間の湯壺を満たす月の潮	〃
91	八月の被爆樹の影人の影	〃
92	日めくりの重き八月十五日	〃
93	白魚の水を孕んで透き通る	金子 竜胆
94	前髪の乱れ直して雛仕舞ふ	牧原ひろみ
95	篠笛に鳥飛び立つや春の空	〃
96	太刀魚のぶつ切りにされ重ねられ	植田 也風
97	雪はねて竹たちあがる朝日かな	嶋田 恵一
98	初刷の紐をかけたる少年誌	福田由美子
99	ぼろ市や伊万里も瀬戸もくくられて	〃
100	いきいきと椿落つなり根の国へ	松本 昌子

124 迷ふことなき明るさの花葉かな
 123 快活な空取り戻す花辛夷
 122 「母入院」「母退院」と古暦
 121 日記買ふ水の暮れゆく御茶ノ水
 120 草餅やははの大きな掌のにはひ
 119 永き日の海へ自転車まつしぐら
 118 大寒の鉄板に焼く赤き肉
 117 ピカピカの春泥知らぬハイヒール
 116 ゆるぎなく「初心」と賀状百一歳
 115 法螺の音の女人高野の山桜
 114 金目鯛ににらまれながら煮てをりぬ
 113 変はる町変はらぬ暮し金魚飼ふ
 112 山笑ふできなくなりし逆上り
 111 庖丁の切つ先に立つ酢橘の香
 110 七福神めぐり仕上げのおかめ蕎麦
 109 父母と弟の墓辛夷咲く
 108 みづうみのはかに騒ぐ余寒かな
 107 歩むさき歩みしあとの櫻かな
 106 黒蜜を好みし母の心太
 105 春風やハープにめくるめく十指
 104 老いらくの恋の顛末夏わらび
 103 自画像に眼の描けぬまま春逝けり
 102 けふよりは秋の木漏れ日よと浴びる
 101 日盛りの浮き棧橋の軋む音

松本 昌子
 〃
 平沼佐代子
 海野マツ子
 星野 将江
 〃
 〃
 大谷 悦子
 林 わか
 宮澤美智子
 平尾 美緒
 〃
 〃
 森 恒之
 長坂 博子
 山崎 奈穂
 吉田 林檎
 湯口 昌彦
 松本もとじ
 猪俣 ま悠
 染井かしこ
 小出 功
 板坂 壽一
 城子 康子

125 手裏剣の飛んで来さうな木下闇
 126 躰きし石にも春の来てをりぬ
 127 みんなみな惚け顔なる桜びと
 128 客引きの腰にカイロの見えてをり
 129 買初は握り飯なり旅の朝
 130 春の雪名残りは風にあるばかり
 131 蝶々のあのねあのねと舞ひ来たり
 132 木槌もて木と語り合ふ桜守
 133 軒氷柱斜めに湖国夜明けたり
 134 山車蔵の高き一棟鳥帰る
 135 紅椿咲き揃ひ闇重くなる
 136 通院の帰りひとりの花の道
 137 花の夜や病得てより後の日々
 138 北を守る高き城垣緑立つ
 139 艇庫の戸開き運河に春来る
 140 ひと息に竹を割りたる淑気かな
 141 汝が死後の花も四度目よ元氣です
 142 鳥雲に入るや星座のかたちして
 143 盆帰省テールランプは帯をなし
 144 父の日のひとつ足らざる将棋駒
 145 花吹雪いまも得意なかくれんぼ
 146 手すさびに奏でてみたる花薺
 147 ぜんざいの粒のつややか春の雪
 148 村挙げて祝ふ一人の入学児

城子 康子
 中川いく子
 澁川 弘
 中村 我人
 藤田美弥子
 頓所 友枝
 〃
 橘川 寿子
 橘田 麻伊
 菊田 一平
 三栖 隆介
 中村 有伽
 増山 叔子
 菊田 一平
 角宮しづか
 前田 拓
 長谷川照子
 みわ・さかい
 佐藤 陽子
 鶴巻貴代美
 福本美恵子
 山下 美佐
 中島真由美
 今田 清三

149 つばくらや父祖の棚田のある限り
 150 一歩づつ近づく星座富士登山
 151 シスターの見事に跳べり春の泥
 152 取り壊す家と語りて端居かな
 153 二歩で鳴きまた二歩で鳴く子猫かな
 154 花曇ゆらりゆらりと風見鶏
 155 御詠歌の鈴清らかに花御堂
 156 バス停に椅子ふるさとの山桜
 157 艶のある葉をすべり落つ春の雪
 158 臘梅の空の深さに足を停む
 159 鉛筆の転がる夕べリラの冷え
 160 卯の花や生家に若き日の書棚
 161 百合を買ふもう病むことのなき人へ
 162 桜しべ降る放課後の水飲み場
 163 合掌の里を旋回初燕
 164 春寒や子規の仰ぎし空の幅
 165 帰り花治験の同意書にサイン
 166 啓蟄や奥歯のあたり疼きだし
 167 桜木は見へねど崖の花吹雪
 168 ロザリオの一粒光る若葉風
 169 白シャツの胸に糸切り鍔置く
 170 恍惚の妻の手繋ぐ星月夜
 171 銀鼠のタイをはどきて卒業す
 172 カウベルの音追ふ犬や草青む

今田 清三
 〃
 石川 笙児
 大岩 真理
 〃
 水谷由美子
 河村里江子
 〃
 徳永ひと葉
 古賀のり子
 岩波 博庸
 岡根 尚美
 〃
 鈴木伊都子
 相川 幸代
 〃
 生嶋 薫
 小林 章
 小林 黎子
 〃
 山月 恍
 久保 修平
 田中 佳子
 斉藤 明子

173 書架迷ふ靴音にある秋思かな
 174 遠ざかる尾灯にも似て春の逝く
 175 月光のどこかぬところ蟻地獄
 176 早晩やくれなる匂ふ牡丹の芽
 177 夕桜世を厭になりきれずをり
 178 テーブルに柿の実のある明るさよ
 179 少年の不言眩し揚雲雀
 180 種袋振つて地霊を呼び起こす
 181 白日傘岩場を跳ねて渡りゆく
 182 囀や樹々のあはひの青き空
 183 ドラム缶錆びてころがる開戦日
 184 月明のひかりを返す象の耳
 185 ファーブルを気取りし父の夏帽子
 186 降り注ぐ蟬時雨なら受けとむる
 187 ギヤチェンジしたる銀輪風光る
 188 広ごれる足指しかと磯遊び
 189 両の手で井戸水もらふ桃の里
 190 きつと故郷への電話花の下
 191 幼子へ日のふりそそぐ仏生会
 192 鈴ヶ森刑場跡に夏蜜柑
 193 それぞれの波を見つけて浮寝鳥
 194 大寒や金属片の残る胸
 195 冬日差す団地丸ごと膨らんで
 196 日脚伸ぶ虫めがね置く年金課

月城 花風
 神津 眞久
 岸根 明
 松本 英夫
 来馬 道代
 嶋田 伸子
 佐野すずめ
 佐藤 倅三
 鈴木 綾子
 グラブ弘子
 棟方 武城
 里見 游
 あべゆう子
 〃
 和智 秀子
 我部 敬子
 濱田 ゆふ
 橘内 訓子
 市村 和湖
 上田 みの
 牧田ひとみ
 伊丹 妙子
 〃
 石井 光子

197 トランクをひく底冷のアフファルト
198 再会は母校の門や落葉時
199 ポケットに軍手振込み種選び
200 寒山を拾得が押す半仙戯
201 手を上げし場所がバス停うらけし
202 子が摘んで牛が食みをり蓮華草
203 鬼の目を突きさたる針も納めけり
204 気がつけば大人の匂ひ日焼の子
205 酔うて買ふ露店のおもちや夏の月
206 ひよつとこの手首太しよ秋祭
207 立春のひかりを畳む卯焼き
208 ライオンの貌に傷あり夏の草
209 湿らせて使ふ黒文字利休の忌
210 花筏集めて木場の貯木場
211 轆や地層あらはに切通し
212 ビルに灯の三つ四つ残る寝待かな
213 満ち潮のやうに暮春のジャズピアノ
214 のどけしや莫蔭に売らるるプロマイド
215 春駒や遠嶺白き岩手山
216 クッキーを鳥の形にみどりの日
217 黄昏は水の如くに花万朶
218 名曲のレコードに艶花の雨
219 ひとつづつ違ふ空ありしやばん玉
220 轆やまだ見えぬ子の眼が動く

神奈川県

16	人中に人の列ある祭かな	倉谷 安子	40	花冷の夜景の中へ帰りけり	渡辺 一充
17	雲のよく流れる日なり聖五月	〃	41	母百寿夢まだありて花衣	木村 晴美
18	献血の出来ぬ齡や震災忌	松田 知子	42	ふるさとの耳に親しき遠蛙	〃
19	口笛の父の機嫌や魚籠に鮎	河村 笑	43	教室にまだ残りゐる卒業子	土生 依子
20	小鳥くる空き家は子供食堂に	中野しおん	44	調教の鞭の一打ち風光る	相沢恵美子
21	指揮棒に佳きこゑ集め春を請ふ	大沢 幸子	45	鶴鳴き交ふや最果ての大落暉	奥田 君子
22	たんぽぽ手に生き物係登校す	〃	46	単色の絵葉書若き日の冬野	〃
23	摩崖佛口より蝶を放ちけり	清水 善和	47	茶処の大きな幟春一番	荒井 東
24	分け入つてただ一本の山桜	相良 研二	48	杙摺る大地を奮ひ立たせては	こしだまほ
25	目を閉ぢて片足立ちや草萌ゆる	尾崎千代一	49	湖のもの食へば近江の朧かな	百田 広香
26	大鯉の背鰭や春の光生む	矢沢 寿美	50	引き絞る弓の静けさ花あしび	原 美鈴
27	オホーツクの空や葉のごと白鳥	〃	51	妣のもの一つ身に付け花衣	〃
28	海一望手話の母子の遍路笠	〃	52	金魚売金魚の鱗流しけり	須田 聡子
29	白菜を横抱きにして畳弥撒	半澤 清隆	53	小面の白の陰翳十三夜	佐野 東隆
30	鬼柚子の身の置き処なく坐る	宮本ゆりこ	54	日直が残る放課後ヒヤシンス	山崎 崇世
31	骨密度はかる三寒四温かな	前田 炎陽	55	飛花落花行きと帰りの歩道橋	吉岡 桂子
32	谷底に生活の道や桐の花	門脇 明子	56	乳の香の心音抱く菖蒲風呂	相良 文雄
33	夕風の魚籠に交じりし鮎の錆	高野 信一	57	大芭蕉実りたわなに枯れゆくか	草風 栗里
34	鴨塚のひそと木暗し春の風	山崎 南風	58	ガン病棟日差し一日百千鳥	高梨 裕
35	爽やかに地裁の扉開け出でぬ	井手 浩堂	59	万緑に己が気配の消ゆるまで	入部 美樹
36	手から手へ赤子を渡す年忘	〃	60	仲見世へ回る楽しみ針供養	鈴木 浩子
37	竜天に登り火口の湖青し	河野 紀生	61	しぶき上げ笑ひ声あげボート漕ぐ	牛田 修嗣
38	数へ歌口に險路の遍路杖	〃	62	カレンダーめくれればゴッホ七月来	〃
39	春昼や鏡があれば立ち止まる	渡辺 一充	63	春埃ゴール代りのランドセル	堤 宗春

64 屋根替の地べたに置ける鬼瓦
65 レギュラーを外されし日の雲の峰
66 影を編み光を紡ぐ鳶若葉
67 盆供養すませ錠掛く親の家
68 うららかや惚けし夫の母となり
69 穴出でし蟻に千里の山河あり
70 鳥獣の耳は眠らず流水期
71 ほうたんの蕊混み合つてゐたりけり
72 啓蟄や手首に残る輪ゴム跡
73 ふきのたう刻めば鳥の声無限
74 ふらここを譲りし後の鉄鎖の香
75 アッパツパ暮らしの下に活断層
76 こんこんと犬を諭すや水温む
77 鳥雲に解体を待つ巨大ビル
78 啓蟄の僧のすり足急ぎ足
79 今はなき母校は城内花溢る
80 野遊や池に来てゐる海の鳥
81 百葉箱当番二人初桜
82 塗替への回転木馬聖五月
83 しばらくは葉上に宿る落椿
84 柚子浮かべ水金地火木土天海
85 カフェラテのふはり泡立ち合格す
86 白梅のながき廊下を綿帽子
87 鶏小屋に砂を撒きたる徂春かな

堤 宗春
大木 雪香
〃
瀧本 万忘
松見喜美子
別所 信子
小田 幸子
蒲谷きよみ
木村 珠江
〃
高杉 桂子
内田知江子
菅野トモ子
〃
種田 千代
近藤 久江
吉田 幸敏
〃
大高 芳子
足立 和子
山口ちひろ
伊藤美紀子
堀口 知子
宮本登美江

88 徴の家立身出世物語
89 卒業やフェンスの破れより握手
90 ゆく春の熊笹を打つ雨の音
91 春の闇埴輪の小さき眼にも
92 千年の仁王の臍に春の塵
93 記念樹の初成り林檎切り分けて
94 桜前線いまふるさとをよぎるころ
95 息たまに言葉となりぬ山桜
96 うぐひすや富士は一日雲の中
97 横顔を撮つてと君へ野の菫
98 ピースなんかするな少年原爆忌
99 そんな夜はおでん屋台へ泣きに行け
100 船頭が手をかしてゐる春日傘
101 雨上がりの丘にずしりと八重桜
102 啓蟄や山に散らばる鳥の声
103 椿落つ昭和に遠き戦禍あり
104 書を曝しいとしきまでの闘病記
105 漆黒の本陣柱余寒なほ
106 菜の花やなじみの顔の入浴車
107 黙々と雪搔く人になほの雪
108 螢の夜一人で帰つてしまひけり
109 うつかりと本音こぼれて夜の桜
110 春浅し豆腐のやうに沈む鯉
111 生傷の絶えぬ走り根春の雪

外山観佳子
〃
池田 忠山
高橋 流行
鈴木 基之
西本美弥子
瀬戸口靖代
折勝 家鴨
鈴木千恵子
太田 喜代
川島ちえり
〃
佐藤 享子
百瀬 碧
卓田 謙一
高橋 菊江
宮崎登美子
宮岡 弘
宮崎 玲子
下村 修
坂間 壽子
大森 春子
山本 浪子
田嶋しゅうじ

112 犬ふぐりまばたきすればまたひとつ
 113 山雀は光のるつば梅の花
 114 山茱萸の黄の跳ね止まぬ川瀬かな
 115 薄墨の魚拓の匂ふ春時雨
 116 飛花落花して現し世を騒がせり
 117 さくら餅正座が楽といふ母と
 118 百千鳥小径ばかりの古墳村
 119 爛漫の花のざわめく夜風かな
 120 大海に映ゆる落日雁供養
 121 花萱草沖を見詰める岬馬
 122 谷底に残る洗ひ場花茗荷
 123 この池の一舟一鵜うごかざる
 124 職退きし目に新たなり山桜
 125 連山や裾明かりして蕎麦の花
 126 淡墨桜仰ぐ人みなほとけ顔
 127 金髪の訪問医師や木の芽風
 128 この島を飛び出す勢ひ半仙戯
 129 しばらくは風を見てゐる花ふぶき
 130 母の忌といふ草餅に与れり
 131 桜薬ふる父母の墓に降る
 132 母さんの退院の日の春シヨール
 133 言葉失せし母につきたる紙風船
 134 畑打つや会津木綿のもんぺ穿き
 135 古きよき町に蔵あり桜あり

前山 真理
 南井 俊輔
 宮永 忠夫
 菅原 健一
 松下 宏民
 高 芳子
 八木 次郎
 原田 功
 有賀 理
 濱田 ふゆ
 河合 順
 喜多村 秧子
 浅木 ノエ
 佐野 淳子
 森岡 正作
 西田 啓子
 若林 和美
 苗村登志子

136 病妻に四温日和といふ恵み
 137 虫干や吾子の産着にひよこの絵
 138 週刊誌二冊伏せあり磯竈
 139 風信子ブリキの玩具並ぶ棚
 140 桃の昼とはき昔にゐるやうな
 141 顔寄せて自撮りの棒を花の下
 142 文鳥の嘴つややかに子供の日
 143 春満月人づてに聞く友の沙汰
 144 連翹のかがやきの中埴輪あり
 145 花ぐもり潮騒を聞くレストラン
 146 花冷やもの言ひたげなデイベア
 147 夏休み悪だくみには肩を組む
 148 菜の花や不意に翳りて不意に照り
 149 花びらを呼び寄せてゐる浮子ひとつ
 150 こそばゆく神馬花びら振り払ひ
 151 落椿踏めば何かの壊れゆく
 152 蛇笏忌の明治の時計鳴りにけり

山梨県

小田田久富
 藤川三枝子
 橋田多賀司
 杉江 美枝
 嘴 朋子
 関山 恵一
 江口 瑠里
 宮崎美智子
 松倉 聖子
 河角 京子
 くにしちあき
 三浦 郁
 安部 李蹊
 小林みほ子

長野県

1 庭椅子の木目あらはに返り花
 2 図書室にバレンタインの日の暮るる
 3 御嶽山を隠す吹雪や村埋む
 4 子規の名を遺す球場春の風
 5 狛犬の阿吽に初日さしにけり
 6 炎天へつづく魁夷の「道」なりけり
 7 苗床を覗くが日課長寿眉
 8 子に未来われに祈りの昭和の日
 9 百僧の鎮護の祈り夏衣
 10 どの窓もコスモスの海鄙のカフェ
 11 春光のあふれ無人の観覧車
 12 釣果とてまこと小さき鮎もらふ
 13 アポロンに腹曝しをり鴟の贅
 14 綾取りの糸引つかかる母の肝
 15 春愁や思ひを声にしたる時
 16 日めくりはをとひのまま鳥雲に

小泉 博夫
 岩永はるみ
 堀川 悦子
 佐藤 徳守
 木原 登
 〃
 西村はる美
 伊藤 加寿
 〃
 堀籠 幸子
 押田 みほ
 種山 啓子
 武谷美智子
 小沼 孝子
 宮澤 薫
 〃

1 お茶席に加はる一日春兆す
 2 涅槃寺に子等の声して団子撒き
 3 猿ぼを幾つも作る冬籠
 4 父逝きてちちの匂ひの雪を搔く
 5 靴下の親指に穴日脚伸ぶ
 6 寒波より寒波にかかる鯨幕
 7 手庇に見る雪崩跡しづまれり
 8 新雪を踏んで乗り込む始発便
 9 立ち読みの古書店の灯や秋惜しむ
 10 暁や名残の茄子に風の跡
 11 涅槃図や五体投地に鳴く象も
 12 木の芽風子供歌舞伎の村動く
 13 ごった煮の鍋ごと持ち来花の土手
 14 風花や名立たる山の顔揃へ
 15 雪掻きのほてる蹠を板の間に
 16 押し入れにいまだ二つの簞枕
 17 地吹雪や重りのごとくランドセル
 18 水垢離の静かなる声堂押祭
 19 潮の香のとどく駅舎に燕来る
 20 若布干す遠景の佐渡引き寄せて
 21 この年のこの場所のこの桜かな
 22 かるきものみな鳥になる花吹雪
 23 千年の桜を仰ぐ誕生日
 24 選ばれし幹に掛けある果箱かな

金子よし子
 小池 旦子
 〃
 高埜 健蔵
 〃
 西村みかん
 古川よし秋
 片桐さと子
 〃
 小林 純子
 羽賀 晴子
 高埜 健蔵
 〃
 野澤ミエ子
 関矢 紀静
 絹沢 裕子
 小黒 音楽
 佐藤 捷司
 佐藤さき子
 〃
 渡辺 水穂
 〃
 山本 武子
 市川 輝子

新潟県

25 喪の家のさくらふぶきとなりにけり

丘 のぼる

富 山 県

1 仕事もつ子に会ひに行くみどりの日
2 山門に下がる草鞋や春隣
3 年暮れの笑ふ胎児のエコー像
4 晩夏光本の売れたる隙間かな
5 千本のアキレス腱が山車を引く
6 鶏鳴や拍手打ちて雑煮膳
7 春愁や父の言葉の背に重し
8 真ん中にあるき写真を女正月
9 悴める声にて下ろすランドセル
10 斑猫を追うていつしか八十路かな
11 寒鰯の豊漁に沸く地震の町
12 味噌汁を温めん雪崩注意報
13 虫出しの雷に降り立つ家郷かな
14 遺影なる父しか知らず龍の玉
15 押へれば膨らみ返す蓬籠
16 ほの匂ふ除雪の肩の湿布薬
17 数へんとすれば羽搏き残り鴨
18 泥靴の立ち替りくる種物屋
19 囀や小枝で混ぜる梅昆布茶

荒田眞智子
升田 義次
長谷田や風
荒田眞智子
平井 弘美
野崎 郁雄
浅野 義信
森 純子
四宮 一子
中坪 達哉
吉野 恭子
角田 睦子
中島 平太
野中多佳子
杉本 恵子
〃

20 ぐづる子を抱へ直して初音かな
21 野放しの鶏鳴高し春の朝
22 両目開くだるまに及ぶどんどの火
23 獣めく夜々に太りし軒氷柱
24 家系図に敗軍三度いぬふぐり
25 桜湯の花を沈めぬほどの息
26 雪あかり午前三時のラジオ聴く
27 母の日のたたんで仕舞ふ包装紙
28 菊の香や色を奏づる加賀友禅
29 どの橋を行くも三味の音風の盆
30 青空の映る方へと春の鴨
31 助手席に大地のにほひ大夕立
32 お水取善男善女闇を待つ
33 良き風が回しはじめる風車
34 体操で始まる授業深雪晴
35 遊び足りたる春泥の靴ならぶ
36 ねんねこの喃語に喃語返しをり
37 残雪と言ふには多き能登に入る
38 手を洗ふ水の重さよ花疲れ
39 セーターに着替へふだんの夫となる
40 身に入むや父の日記に我が名濃し
41 のどかなる三時シナモンロールの香
42 北窓を開き要る物要らぬ物
43 子等笑ふ声にも似たり若葉風

杉本 恵子
〃
成瀬眞紀子
倉沢 由美
古小路憲子
畠山 美苗
〃
新村美那子
〃
中村 豊美
室井千鶴子
橋本しげこ
四十物文代
立花 千鶴
石黒 順子
小嶋トシコ
荒井 君代
宇波可津志
脇坂琉美子
〃
〃
横山 優子
〃
野村 邦翠

44 ひらがなのやうな雨足柳の芽
45 花疲れ脱ぎ散らかせば絹にほふ

浅尾 京子

石川県

1 過疎の田の山に戻りぬ百舌のこゑ
2 十万石の竹割り神事建国日
3 昂りの御輿に入るる百の肩
4 子に渡す杵の温みや寒の餅
5 船虫の影捨て去りし真昼かな
6 洪水碑花見の土手の片隅に
7 春泥の光とばして鬼ごっこ
8 ふるさとは遠し四月の時刻表
9 燕の子千里の飛翔まだ知らず
10 春光を掻き分けてくる帰り舟
11 もがり笛いまだ破船のそのままに
12 春光へ大きく開く絵本かな
13 炊き出しの匂ふ避難所つばめ来る
14 亀鳴くや隆起に瘦せし潮汲場
15 朝靄にしづむ一村草雲雀
16 ここにゐることが復興青き踏む
17 蓬摘む校庭下の崖に添ひ
18 蓬摘むうしろ姿の無心かな

蔵 堯子

植木 静恵

中西 石松

東 洸陽

沖野 晶子

中村 双舟

村井 倫子

竹中 昭子

東 洸陽

渡辺 恵子

〃

〃

枅谷 栄子

海老名由美子

豊田 高子

宮田 勝

井端 久子

〃

19 紙漉の村を貫く冬の川
20 どんど火の弾け火守りが仰け反れり
21 雪降るやポストは地震に反り返り
22 今日処暑の更地となれり学生寮
23 寒鯉を置き去る津波交差点
24 降る雪や戸口の狭き仮住まひ
25 春近し小さき我が家の設計図
26 ふらここの軋みて二胡の音色めく
27 自転車のサドルを高く木の芽風
28 山姥のうつつの闇へ春の雪
29 野遊びや加賀一国の見ゆる丘
30 海月群る波のうねりを重くして
31 塩田に上がり込みたる波の花
32 あたたかや二歳のあやす赤ん坊
33 風が織る麦の穂波や農を継ぐ
34 靴下を脱ぐ一瞬の花疲れ
35 等伯の里や磯馴の松おぼろ
36 地震あとに木木の息吹や呼子鳥
37 もんしろてふうわうさわうといふ自由
38 ボス猿にちつと見らるる探梅行
39 天翔ける鷹呼び戻すホイッスル

井端 久子

〃

〃

〃

〃

中川 雅雪

〃

〃

清水英理子

小崎 淳子

瀬川 恵

坂下多津緒

〃

松村 敏子

不破 鏡子

船本 静江

酒谷 貞子

北川 愛子

山田 一男

宮崎 浩美

吉川 静代

福井県

1 母を恋ふ栗の渋皮剥く夜は
 2 産小屋の残る海女怪いぬふぐり
 3 退院を控へし試歩や青き踏む
 4 四脚門潜り忽ち花に酔ふ
 5 立山を望む廃校桜さく
 6 遊ぶ子の影やはらかし水温む
 7 聖五月孔雀は羽根を展げ切る

畑下 信子
 鶴田 勝子
 堀川久美子
 岡田 有旦
 村田 浩
 原 稔
 西村 圭子

岐阜県

1 奥美濃の清流の瀬や楮踏む
 2 宿下駄の音も加はり踊の輪
 3 草萌ゆる後継ぎのなき休耕地
 4 ふくろふが鳴くまでホットウイスキー
 5 佗助や胆嚢に石飼ひ殺し
 6 緑蔭や日の斑を膝にまじろみぬ
 7 三月の駅ハチ公をまづ探す
 8 あんず咲くブルカの奥の緑の眼
 9 若葉風牧を歩かす牛百頭

小林 栄美
 直井 照男
 三輪 洋路
 福井 英敏
 〃
 水上れんげ
 名和よちゑ
 馬田 耕平
 早崎美弥子

静岡県

10 臥す母に鏡に見する植田かな
 11 夏蚕飼ふ山犬様のお札貼り
 12 十八の一票投じ卒業す
 13 変りなき母の病状大根煮る
 14 春の夜の柩の姉の髪ゆたか
 15 風の糸消えて日の中風の中
 16 淵といふ密やかな闇残り鴨
 17 ひとひらの花をたたみし舞扇
 18 親しさは名もなき橋や犬ふぐり
 19 げんこつで涙ぬぐひし卒業子
 20 じよつぱりの母の百年花林檎
 21 水底に雨は届かず桜桃忌
 22 ふる里を忘れぬやうに武具飾る
 23 闇の字の中に音の字虎落笛
 24 芽起こしの雷よ山火事跡にこそ
 25 青山河オカリナの音の延びゆけり
 26 一山の傾くごとし蟬時雨

大井 公夫
 矢田 邦子
 島津 美恵
 園 るみ子
 富田 澄江
 島田 和典
 関谷 恭子
 安田 一義
 〃
 〃
 名和よちゑ
 森 瑞穂
 渡辺 美晴
 後藤 和朗
 〃
 小林 真木
 〃
 静岡県

1 強風や膝頼り無き探梅行
 2 肉叩く包丁の峰小鳥来る
 3 秋草を子規忌の空に描きたし

水野 征男
 鈴木 慶子
 〃

4 あたたかし火曜日だけのぼん菓子屋
 5 震災忌ときおり猫の耳が立つ
 6 寒晴れや銀座へ向かふ靴磨く
 7 指と指合はせてハート卒業生
 8 梅東風や吉祥天の裾乱る
 9 蒼天の富士に農鳥茶摘唄
 10 たましひと云ふまんまるものあたたかし
 11 花八手納屋に古りたる農薬瓶
 12 めたば跡白詰草の真つ盛り
 13 啓蟄や築百年の雨戸繰る
 14 これよりの生は余白よかたつむり
 15 朗朗たる師の声聞こゆ春霞
 16 未来図は未完のままや卒業子
 17 鳶の輪や枯蘆原に光満ち
 18 住宅街残る田一枚啼く蛙
 19 一茶忌や明日は雨てふ畑仕事
 20 蓬髪をなだめて男の子彼岸寺
 21 杖の歩のからし踊子草をどる
 22 山国の雲の厚さや葉喰
 23 陽炎や木曾馬は息太く立つ
 24 おはぐろを弾ませ沼の遊び蔓
 25 虫追ひの列に加はる野球の子
 26 喉を焼く電気ブランや三鬼の忌
 27 おしろいの俯く朝の通り雨

河江 昌子
 〃
 〃
 堀 和久
 いしづかすみれ
 杉原 明美
 久野 範高
 田中 純子
 〃
 坂本 操子
 チョウコビーン
 〃
 鈴木 健司
 柿野 秋生
 勝山 美枝
 青嶋三千代
 〃
 林 浩世
 〃
 杉澤 修
 〃
 〃
 〃

28 手を触れてみたき寝釈迦の臉かな
 29 日に仕へ土に仕へて苗木植う
 30 仏間までかまどの煙花の雨
 31 初荷着く棚に福助招き猫
 32 頬杖について金魚と見つめ合ふ
 33 パソコンに倦みて胡瓜を刻みをり
 34 テレビ消し戦争を消す春炬燵
 35 富士見ゆる段々畑梅二月
 36 存へて何せむ我や啄木忌
 37 勿忘草ときに童女の母の笑み
 38 今生に父母夫はなく花は咲く
 39 門柱に残るほてりや盆の月
 40 介護二と言はれすかんぼ噛みゐたり
 41 愚直なる刑事一代鬼やんま
 42 卒業式母の小さくなりにつけり
 43 ふるさとの歌は波音水仙花
 44 大試験母の力のにぎり飯
 45 兄と来し知覧の桜けふ母と

杉澤 修
 月花ふみ子
 渥美 絹代
 〃
 神田美穂子
 〃
 亀澤 淑子
 望月かほる
 安寿 文
 〃
 関口喜代子
 〃
 山田 初枝
 鈴木 齊夫
 高島 昭子
 岡部すみれ
 前川 幹子
 及川 光代
 岩田 暁子
 駒木 逸歩

愛知県

1 猫と猫顔を見合はせ春隣
 2 灯下親し芭蕉旅信に軒の図

3	頬摺りに糶待つ牛や師走風	富田 範保	27	石炭一片軍艦島の草萌に	藤本 恭子
4	烏帽子より垂るる巻髪針供養	安藤 亮子	28	裏木曾の桧葉もて葺かれ花御堂	渡辺美智代
5	切り口が鋼のひかり備長炭	尾崎恵美子	29	御朱印の乾く間合や百千鳥	〃
6	獵犬馳す獵夫の顎の動き見て	〃	30	おみあしのごと撫で洗ふ遍路杖	〃
7	蛇穴に入り大楠の幣揺るる	平松 公代	31	漁火の重なり合うて海隴	〃
8	糶牛のお守り揺るる師走風	富田 範保	32	誰よりも長き磯笛八十路海女	〃
9	陽のあたる病室にある寒さかな	宇野 順二	33	うららかや連れ啼きしたる牧の牛	〃
10	寄席はねて骨正月の町あかり	日比谷洋子	34	竹秋の風を通せり躍り口	林 尉江
11	思ひきりこゑのぶつかる寒稽古	柴田 孝江	35	折鶴に息吹き入れて春待つ子	光田 道子
12	屠蘇醒めぬままに出漁貝を搔く	富田 範保	36	風見えて母郷何処も稲穂波	〃
13	手の色に透くる白魚品定め	〃	37	父の文字母しか読めぬ種袋	古賀勇理央
14	柿若葉干されて白き岩田帯	上原 敬子	38	花火果て潮騒寄する闇深し	小原 米子
15	走り梅雨鉄の匂も懐かしく	米田 正弘	39	銃眼を覗けば鴨の射程距離	佐藤三千子
16	鳴き砂の声に和したる秋夕焼	松永 房子	40	斎王の道を逸れずに蝶二頭	〃
17	裏口を開けて三和土の春めけり	足達紀代子	41	春炬燵一人に慣れてしまひたり	〃
18	初節句二台で運ぶ甥の竹	大巻 仁保	42	豚の仔の尾まで桃色花菜風	〃
19	雨あがる摩文仁の丘や初燕	大島 知津	43	揚雲雀故郷見ゆる高さまで	橋本 孝子
20	恋猫の一念とほす面構へ	古賀勇理央	44	ひらがなの舞ふがごとくにぼたん雪	井上千保子
21	大阿蘇の微塵となりて土筆摘む	〃	45	山裾に暮らす三代稻を刈る	棚橋 洋子
22	田舟吊る梁の昏さや斑雪	原田津多江	46	目が見えて手が動かせて毛糸編む	稻熊 明美
23	その齢になれば分かるよ木瓜の花	山田 雅弘	47	亡妹の料理日記や芋殻焚く	海神 瑠珂
24	襟巻を持ち徘徊の母を追ふ	佐藤三千子	48	馬鹿みたいに欠伸とまらぬ遅日かな	梅田 昌孝
25	燕来て土間の空気の入替はる	〃	49	堂々と老人となり山笑ふ	水野 幸子
26	蔓苧に身を縮めたる寒牡丹	富田 範保	50	膝によむ書物の重み遅日かな	谷中 弘子

51 舳挿すや嫁いだ日から舟にのり
 52 柩出る梅散り初めし村境
 53 春昼や絡まりてある首飾り
 54 燕来る昭和のシネマ残る町
 55 フルートの音のせせらぎ花菜畑
 56 軒先の寒暮をめぐる郵便夫
 57 花冷や浮き出て鯉のあぎとへり
 58 馬蛤貝の穴均したる波柔し
 59 花人に門開け放つ少年院
 60 家仕舞ひ青梅のなる草の庭
 61 サマードレス君と会ふ五分間のために
 62 潮干狩太平洋の裾を踏み
 63 名を呼ばれ梅の中より応へけり
 64 爪先に残るマニキュア休暇明け
 65 花万朶園は熟寝の静けさに
 66 春の雲窓辺に吊るすフライパン
 67 馬になる兄の小さき背うららけし
 68 食卓を窓辺へ寄せて蝶の昼
 69 春愁や上目遣ひの占ひ師
 70 田ごしらへ雀隠れにラジオ鳴る
 71 雲雀野へ窓開け放つ保育園
 72 杜氏帰る雛の酒を家苞に
 73 風花と行く山城の物見台
 74 若布茹づ津波の海へ背を向けて

古賀 理之
 中川 キヌヨ
 寺島 美子
 音頭 恵子
 西尾 桃太郎
 古賀 理之
 岡田 理江
 森田 富子
 土屋 せつ子
 長谷川 せ津
 古川 千鶴
 佐合 たけし
 安藤 圭子
 高橋 毅
 吉田 春陽
 岩瀬 久美子
 近藤 京子
 小林 節子
 荒川 くみ子
 高橋 典子
 加藤 行恵
 渡辺 加美江
 富田 範保

75 ふれあへばいのちの音の蜩かな
 76 空堀のなぞへ明るく鼓草
 77 貝殻はすべてなきがら八月来
 78 坂を漕ぎきて大汗を笑はるる
 79 噴水の水のすべては水に落つ
 80 ちぐはぐな夫婦の会話のどかなり
 81 しじみ汁光沢のよき輪島塗
 82 卒業や空拭くやうに手をふつて
 83 製図板残してゆけり巣立鳥
 84 黒き海苔炙り返せば海香る
 85 春一番パンとコーヒータまご焼き

三重県

1 裏木戸に年輪の浮く年の暮
 2 海女として離島に眠る落椿
 3 虎落笛重き願の絵馬ゆれる
 4 瀬に渡す丸太一本山ざくら
 5 畳屋の広き門口風光る
 6 海女小屋の敷居の高さ蟹歩く
 7 たんぼや空家作らぬ村の結び
 8 岡持が自転車で来る花堤
 9 鹿はねし後の残れる今朝の雪

刈屋 まさを
 伊藤 明子
 石川 裕子
 古賀 勇理央
 大川 八重
 天野 れい子
 中根 由起子
 菅 弘美
 水野 巨海
 鈴木 哲也

服部 たけし
 木下 郁子
 近藤 昶子

いりやま 勝英
 伊藤 久子
 浜西 修
 島井 節

10	座長以下五人の芝居梅匂ふ	橋本 石火	34	弾痕を今に伝へて柱凍つ	伊藤 正子
11	春風や藍に塗れる藍染師	館 千恵子	35	流水の白を極めて春深し	手塚 泰子
12	城址は石垣ばかり葛の花	西尾 敬一	36	敗戦日風に吹かれてをりにけり	伊藤 孝子
13	早苗饗や土不踏より来る疲れ	〃	37	組紐の駒音ひびく桜冷	川村 清子
14	花いかだ真珠筏を曳きにけり	〃	38	漆黒の初瀬の山のはつあかり	池森はる子
15	口紅の減らぬ歳月椿咲く	畔地佳永子	39	竹の皮脱ぐ節ごとの潤みをり	〃
16	寒の海泳ぎ切つたる瞳かな	水谷 洋子	40	吹かるるは我が身ひとつや桜東風	岩倉 佳子
17	つちふるや地面に古き鬼瓦	山中 綾	41	紙ひかうき海へ飛ばして卒業す	稲垣いつを
18	白魚のいのちの果ててより白し	松村 正之	42	梅が香や背に微かなる子の寢息	大石 桑鼓
19	ひと枝は田の神へ降る朝桜	米野てるみ	43	花ふぶく八番線の回送車	館 ゑみ子
20	朝座禪雪搔きの息しづもれり	古川 和子	44	少年の膝つこぞうや麦の秋	〃
21	風花や電光板に流れる死	林 里美	45	かぎ針の一目をこぼす春の昼	金津やよい
22	たちまちに声もずぶ濡れ磯遊び	三ッ矢龍美	滋賀県		
23	雪嶺の比良銀盃の酒辛し	岡島 千秋			
24	風音はついに雨音花辛夷	〃			
25	永き日の沖待ちをはるか貨物船	久松 雅彦			
26	鮎釣の流れに夫の仁王立	坂本 ふき			
27	合格子青春切符にて旅す	森田 久枝	1	昼は田に夜は神楽を舞ふ男	古川 武人
28	水かけて青む砥石や芹の花	宮谷ふさ子	2	冬草の土手に尻跡恋の跡	〃
29	種袋振りて赤子をあやしけり	〃	3	減便の路線バス待つ文化の日	〃
30	連翹のひかりに隠れたるは誰	池田 緑人	4	龍淵に潜み湖北に観世音	宮田絵衣子
31	七輪に湯の沸いてをり花見茶屋	宇田多香子	5	虎杖の群れゐる奥の流刑小屋	竹内 恵子
32	鯉船雲引き連れて出港す	川合 悦子	6	桜まじ船輝きて入港す	野辺よつ葉
33	父の日やまだ補聴器の残る棚	西岡せつ子	7	比良比叡ずしりと据ゑて鮎を挿す	土井 妙子
			8	躊躇なく妊婦二つ目桜餅	藤田 啓子

9 空晴れてけふ立春の野の息吹
 10 廃校の百葉箱と桜かな
 11 鉄の音茜を負ふてなほ朧

京都府

1 エジソンの竹も長閑や石清水
 2 夜仕事の合間のチャイや月を見て
 3 鏡文字混じる幼の初たより
 4 洛中は披露地ばかり十三夜
 5 古墳より古墳を望むうらけし
 6 淡雪の朝のしづけさ茶を熱く
 7 種袋まづ音を聞く母の癖
 8 汗を拭き墓石を拭き汗を拭き
 9 流木に曲る鍔釘多喜二の忌
 10 恐竜はなべて骨だけ春の泥
 11 猫が踏み長靴が踏み犬ふぐり
 12 うららかやありがとうだけ言へる姉
 13 空は雲桜は鳥を遊ばせて
 14 げんげ田のにはひたつ風墳墓まで
 15 春眠や机に伏して雲に乗る
 16 蝌蚪生まれこの世の水を濁しけり
 17 むつ飛んで有明海の狭くなる

服部登紀子
 福田 連
 井口 光

大谷 昌子
 坂田由里子
 渡辺 佳子
 池田 華甲
 古川 邑秋
 坂口夫佐子
 福井 貞子
 新倉 眞理
 中村 優江
 詫間えりこ
 宮井 斗史
 大瀧 和子
 横滝 友子
 加藤 草児

18 ふらこを漕げば始まる親離れ
 19 落椿振り返ることなかりけり
 20 薄水を碎けば風の矢りだす
 21 真つ黒な運河の他は雪の街
 22 ひと雨のあとのひと声初音かな
 23 地獄絵のたるんでゐたる日永かな
 24 野遊びの兎のやうな女の子
 25 ハミングのごとき風の音芽吹山
 26 万華鏡回せば春がやつて来る
 27 轉やマルゲリータの焼き上がる
 28 玄室に人の声する桜かな
 29 残雪の連山朝の陽を返す
 30 斑鳩の塔を遥かに若菜摘む
 31 春風やふふと寒山拾得図
 32 もやもやもうずうずも春半ばかな
 33 泣くことは癒すことなり風光る
 34 凍ゆるむ療法士の手確かなり
 35 比良の風少しやはらぎ鮎を挿す
 36 しやばん玉あの世をちよつと覗きたく
 37 立ち漕ぎの坂の天辺夏の雲
 38 好きなことだけして生きて花の雨
 39 貝寄風や行く先決めるコイントス
 40 今日の幸包み夕べのチューリップ
 41 少しづつとんぶりになる箒草

加藤 草児
 平 万紀子
 古野由美子
 蓮井いく子
 若見 洋子
 辻 睦子
 植松 秀子
 三宅美千子
 宮谷 昌代
 濱岡 学
 加茂前朱美
 佐藤 保子
 福田 嫩子

42 驢馬に餌をせがまれてゐる日永かな
 43 霞草足して花瓶の向き決まる
 44 遠足の子ら猿山の猿数ふ
 45 柴犬の正座してをり花筵
 46 吹きを泡に閉じ込め氷柱伸ぶ

大阪府

1 春炬燵また約束を反故にして
 2 錦絵のごとく敷きつめ散り紅葉
 3 雪国の星降る音を聴きに行く
 4 打ち水を空にも打つて終りけり
 5 雪解けの何処まで続く轍かな
 6 畏まる父の両膝雛の膳
 7 駆くる子に置いてきぼりの白日傘
 8 代はる代はる押す遠足の車椅子
 9 母許にゐるそれだけの涼しさよ
 10 葱刻む忘れたきことありし日は
 11 まだいける追雛の豆を歯で噛める
 12 老人の爪よく伸ぶる芒種かな
 13 玄関に部活帰りの春の泥
 14 義士祭や郷土の誇り数右衛門
 15 地芝居や動く女形の喉ぼとけ

芳野 珠江
 徳永 真弓
 沖増 修治
 恒藤 俊子

角 雅行
 西本 睦子
 野口喜久子
 永田 圭子
 阪井 京子
 今井 文雄
 高倉 明子
 小寺 昌平
 瀬野 浩
 石川 揚子
 岩本 正捷
 藤堂 俊英

16 葉牡丹や女ばかりの昼のヨガ
 17 古雛船場ことばの聞えさう
 18 霧晴れて杉百幹の目覚めかな
 19 暈替へ裏に方位の書ゐてあり
 20 丹頂の雪に透くほど羽根の白
 21 父と子の風風揚がれ河川敷
 22 河豚五尾をさばく傘寿の同窓会
 23 眠りさそふやうな芒野バスを待つ
 24 涅槃図に香箱座りする猫も
 25 蟬溶かす許りの夏炬ジャワ更紗
 26 還らざる父の遺骨か黄沙降る
 27 遺書となる父のはがきや終戦日
 28 世の音の遠くなりたる春の風邪
 29 落蟬のまだ終はれぬと翔びたてり
 30 遠足子慰霊碑に手を合はせをり
 31 木道は猿の溜まり場雪解けて
 32 着陸のきらめく夜景湾涼し
 33 母織らぬ機にせめての注連飾
 34 終電の去りたる闇や牛蛙
 35 逝きし友つま逝きし友冬の雷
 36 ぢいちやんの蜜柑の鳥と指すデッキ
 37 春眠や本に挟みしままの指
 38 ジェットコースター悲鳴の父を山笑ふ
 39 眠る児を抱き風船を持て余す

松本 峰子
 福本せつこ
 譲尾三枝子
 川上 純一
 大西富紀子
 佐藤 英子
 藤岡 満
 伊田タキ子
 高田佐土子
 大西きん一
 小林 千晶
 新谷 壯夫
 滝本 香世
 大島 幸男

村井津哉子
 〃

卒業歌少し離れて老教師
 椎の花龍の匂ひと思ひけり
 目刺焼く三河七輪取り出だし
 広き空軽く押し上げチューリップ
 ひたすらに流るる川や原爆忌
 佐保姫の朱の橋渡る気配せり
 西行庵尋めゐて雉子を翔たせけり
 椿まだ炎ゆる余力のありて落つ
 又湧きし四五羽を加へ鳥帰る
 楚々として咲いてぢごくのかまのふた
 失敗まで見込むマニユアル新社員
 明易し朝刊既に我を待つ
 石庭に舞ふはいづこの花ならむ
 落葉踏む音に心が軽くなる
 苔被るわらべ地蔵に降る紅葉
 さへづりを追へば整ふ句のリズム
 小秤ではかる生葉黄砂来る
 もしもしの後は春風糸電話
 湯浴みするごとく吉野の花浴ぶる
 疑問符の多きエッセイ猫の恋
 山を圧し冬満月の上りたる
 千年の花千年の仏守る
 身を反らせ刈蘆の束持ち上ぐる
 あたたかし大小のある半分こ

平尾 徹美
 立川 六珈
 保母 洋子
 田中 清司
 川上 なみ子
 池田 和子
 山口 登
 安部 桂
 小元 洋子
 三宅 崇代
 石井のぼる
 串田 洋子
 師岡 洋子
 藤田 駒代
 榎崎美和子
 乾 祐子
 藤野 智弘
 吉田 喬
 宮川 育子

朝掘の春筍泥も湿りをり
 霊やかすかに残る蒙古斑
 すかんばや指切りげんまんして別れ
 初めてのスーツ皮靴入学す
 大花野さみしき色を集めたる
 奥入瀬の弾む瀬音や木の根明く
 KOBANに子どもが二人蝶の昼
 花人となりて天神橋渡る
 橋のどか園児の列に追越され
 抽斗に遺影の戻る四日かな
 角打へ女が走る白雨かな
 月朧お不動しづくしたまへる
 夕桜大きな鞆肩にかけ
 稲雀ばらばらに來て群れ去りぬ

中内ひろこ
 岩出くに男
 西上 禎子
 安里 道子
 鶴賀谷 修
 浅田 光代
 上田 和生
 西田 洋
 浅田をさむ
 奈良県
 田村 英一
 緒方 順一
 堀上 慶子
 朝涼や宮司出社の下駄の音

7 地球儀を囲む生徒ら夏近し
 8 引き出しに遺る名刺や花曇り
 9 手を洗ひねんごろに雛納めけり
 10 ふるさとの山の匂ひや雪解風
 11 新聞を隈無く読みて頼祭忌
 12 口々に記憶の欠片盆帛省
 13 爽やかに言の葉こぼる手話の指
 14 野遊に飽されば母の背に凭れ
 15 布靴の十一センチ青き踏む
 16 すかんばやオート三輪畦に止め
 17 新聞を足して加はる花筵
 18 我が影を削り続けて耕せり
 19 散る音をかすかに桜月夜かな
 20 三輪山の裾さらさらと芹の水
 21 雛の灯消せばひひなの息づかひ
 22 花散りて吉野の月日流れけり
 23 芦刈るや背丈を伸ばす近江富士
 24 牛の健啖山羊の健脚山笑ふ
 25 花御堂茸く大黒と肩ならべ
 26 けもの径行くはめとなり桜狩
 27 卷尺のしゆると戻る日短か
 28 花行脚西行塚に果てにけり
 29 待つ心惜しむ心も桜かな

榊原 範子

長谷川紀美子

和歌山県

福西 泰子
 川端 秀子
 池田 雪彦
 高橋 翠
 小島 元博
 内田 茂
 小林伊久子
 阿部由希子
 酒井久美子
 市村 健夫
 福田えいじ
 阪本 道子
 村手 圭子
 山越 桂子
 鈴木 玲子

1 竹傾ぎ竹の触れ合ふ余寒かな
 2 涼しさはシマトネリコの花の色
 3 蚯蚓鳴く門なき古寺や草枕
 4 大皿で足りぬグラタンクリスマス
 5 亡き父の癖字引継ぐ彼岸の子
 6 夏潮の藍へのびゆく滑走路
 7 大津絵の鬼には投げぬ年の豆
 8 恋蛭むかしの闇は底知れず
 9 初日記良き事だけでむすびたる
 10 声高に一年生の帰宅かな
 1 邸跡にその人の名の桜咲く
 2 灯籠の火口は冬を待ちにけり
 3 初釜や駅もみ寺も西大寺
 4 力餅抱けば春陰深まりぬ
 5 宿墨に朝の水足す寒見舞
 6 跡取りのなきこと悔やみ十夜婆

谷中 明子
 北畑貴久子
 徳永 康人
 高井貴佐子
 下村ツヤ子
 長谷川閑乙
 倉田 信司
 田中 衡子
 鈴木 憲一

兵庫県

桐生 紫
 松田 寛生
 田中 敏子
 衣笠 修爾
 関口 烏石
 藤野 慧子

7 三羽たちすぐに四羽きて寒雀
 8 散り散りの絵地図のやうに若布寄す
 9 うらけし誰も憎まず憎まれず
 10 触読のふと止まりたる花の昼
 11 最果ての花野が包む駅灯り
 12 どよめきに火勢増しけりお松明
 13 春の風サテンのリボン解くやうに
 14 鴨の子の親の水尾よりはみ出さず
 15 鷗忌や夕日の押せる油槽船
 16 そそり立つ国生みの岩船遊び
 17 シクラメン窓辺明るき保健室
 18 鳥曇取り出せる古書ふと戻す
 19 麦青む片方に琵琶湖広がりて
 20 スズメ目スズメ科スズメ春を待つ
 21 聖歌譜に丸き木もれ日阪神忌
 22 京都より車掌の代はる日永かな
 23 青饅やいつも正論説くあなた
 24 体育館へすのこ板踏む入学式
 25 苗木植ゑ終の住みかと決めにけり
 26 藩校に遺る書院や竹の秋
 27 淀川のはじまるところ飛花落花
 28 春光の雲ひよいと押す象の鼻
 29 花のもと見知らぬ人と語らひぬ
 30 朝風の生まれたてなる蝶運ぶ

藤野 慧子
 奥村 芳弘
 橋本 正幸
 出店智恵呼
 千堂 富子
 大橋 節子
 山口 知子
 谷添 睦子
 榎本世貴子
 大星たかし
 長野 順子
 細野 恵久
 たなかしらほ
 日野 久子
 島田 由加
 岩崎可代子
 小林 美鈴
 森山 久代
 山岡仁美子
 高岡 敏子
 野口 郁子
 豊岡 正年
 堀 瞳子

31 朝の日に光る天守や飛花落花
 32 老人の太き背骨や青嵐
 33 鳥ぐもり靉の底の暗さかな
 34 裸木となりて怖るるものもなく
 35 かくれんぼ少女の消ゆる花菜畑
 36 嘘泣きの子にはじけたるシャボン玉
 37 横顔のミロのヴィーナス春の燭
 38 月こよひ上澄みに似る笙の音
 1 授乳期のおもたき乳房髪洗ふ
 2 鈴付けし子猫を呼ぶに鈴鳴らし
 3 火の粉吐く鬼女の相なる花簪
 4 鉄棒に順手と逆手春寒し
 5 父祖の山出で来し川に雛流す

松井 春雄
 瀬戸 幹三
 山田 綾子
 上和田玲子
 中野はつえ
 常澤 俊子
 千鳥 由貴
 岩水 節子
 河本 貴
 堀江 典子
 吉浦 増
 〃
 〃

島根県

鳥取県

4 能登の子に能登の風吹く鯉幟
 5 豊饒の海は鈍色流水来
 6 嬰の指ころころ丸し梅日和
 7 息白く男寡黙に竹を編む
 8 神官の袍の藤色風薫る
 9 春光や銅剣あまた埋めし峡
 10 日の当る椅子の子猫や子の忌日
 11 野遊びの子に夕星の二つ三つ
 12 空爆の国と青虫つぶす吾と
 13 行列の馬の機嫌や花の城
 14 石鹼玉放たれて空ゆらぎけり
 15 筋肉の輝いているプールかな
 16 ぼたん雪薪もて沸かす湯に浸り
 17 花吹雪一両電車ゆつくりと

吉浦 増
 〃
 神田 敬子
 〃
 足立 歩久
 中島 すみ
 小村 絹代
 卜部 純栄
 河合のぼる
 三島ハルエ
 足立 歩久
 〃
 高橋 猛
 大庭 安代

岡山県

1 寒菊や序列に並ぶ義士の墓
 2 残心に朝日の差せる弓始
 3 枇杷の花千手は同じ物持たず
 4 義士会の義士に裏門表門
 5 水垢離に締まる禪裸押し
 6 一駅を眠る学生年の暮

杉本征之進
 〃
 〃
 〃
 〃
 西村 泉

7 屁理屈を鍋に煮込んでおでん酒
 8 植木市値札に端数なかりけり
 9 手に掬ひいよいよ独楽の澄みにけり
 10 木像に残る金箔うらけし
 11 讃美歌のやうな夕焼け港町
 12 ぶらんこを漕げば智恵子の青い空
 13 幼子にちちんぷいぷい木の芽風
 14 寒晴の嘶きさうな神馬像
 15 漂ふにあらず寄り添ふ春の鴨
 16 開け放つ結納の日の春障子
 17 鶯替や明日より後期高齢者
 18 足入るる早苗田水の動きだす
 19 動くもの動かざるもの蝌蚪の紐
 20 牙返る一段高き自刃の間
 21 初鳴を聞くや病夫の聞きし後
 22 かんばせは花の白さよ紙雛
 23 この上に義民の墓や露の臺
 24 春風を連れ引越の荷物来る

藤田 明子
 杉本征之進
 磨家 泉
 杉本征之進
 柴田 奈美
 〃
 〃
 山本麻沙子
 柴田 奈美
 大塚 功子
 沢 紅子
 前田 留菜
 杉本征之進
 〃
 谷本 緑
 樋口千恵子
 高木 幸子
 岡田 邦男

広島県

1 曼珠沙華跨ぎ釣場へ急ぎけり
 2 投げ出して鯨鯨捌く雪の上

石橋 康徳
 〃

3 滝開き空より水の匂ひ来る
4 鶴塚を染むる夕日や小六月
5 飼葉食む馬の眸に落花かな
6 寒風や分厚き胸の仁王像
7 紅梅の香の濃かりけり廓跡
8 葉桜や鱗まみれの竿杵
9 かりがねや神話の川へ月さして
10 潮騒のとどく堤に胡麻乾せり
11 霧ふかき浦を囲みて船屋の灯
12 守宮の子看取りの窓にはりついて
13 慰霊碑の裏にあまたの蟬の穴
14 雛舟胸にしつかと抱きくる
15 雲に触れ開く泰山木の花
16 幾重にも紙に包まれ走り枇杷
17 産み月の牛に一匹蠅まとう
18 島人に広き空あり花南瓜
19 砂利船や音戸の瀬戸に春の雷
20 藤房に湖わたる風とどきけり
21 鉄路まで冬の白波押し寄せり
22 水軍の島や戸毎に立葵
23 屋根替への真上に雲のほぐれけり
24 はらからの父似と母似福寿草
25 焚き口に団栗まろぶ休み窯
26 鰯雲錆びた梯子の上に海

51	寒の雨仔牛は藁を蹴散らして	坂本たか子
52	東京へ日帰りの旅三鬼の忌	〃
53	螢や暈のかかりし月のほり	〃
54	波音のかすかに届く小判草	〃
55	湖の辺に画架組みをれば小鳥来る	〃
56	イヤリング大きく揺らしラムネ飲む	〃
57	春深き濠に浮かびて鳥の羽	〃
58	乾杯のグラスのごときチューリップ	〃
59	涅槃図に残りし金や波の音	〃
60	浜木綿やかつて鯨の解体場	〃
61	航跡の白さに秋の近づきぬ	〃
62	濁声の鴉に茅花流しかな	〃
63	蒸し鮎をあためなほし十三夜	〃
64	ふるさとの雨の匂や芋雑炊	〃
65	山の端に湧きて差羽の渡りけり	〃
66	潮騒のときをり近き無月かな	〃
67	秋風やかつて砂鉄を採りし川	〃
68	鳥影のついと大きな春田かな	〃
69	日脚伸ぶ鯉ゆつくりと尾を曲げて	〃
70	百歳まで生きるつもりの大朝寝	有田 幸恵
71	瘤に洞抱く被爆樹花万葉	加藤 浩
72	河を見て海と言ふ児や土筆摘む	坂本たか子
73	番犬の眠りてばかり蝶の昼	〃
74	海へ向く鯨の墓や鳥曇り	〃
75	葉桜の風に赤んぼ抱き上ぐる	坂本たか子
76	地芝居の印籠を見せ終りけり	森本ひろ子
77	君子蘭校長室に内示受く	三宅千恵美
78	黴の香の師よりの手紙また仕舞ふ	坂本たか子
79	駅小春声の優しき券売機	松原とし子
80	泥濘の足跡あまた農具市	宮永 直美
81	初つばめ空き家に残る番地札	浅田 洋子
82	呼鈴の三度鳴るまで出ぬ炬燵	神根 信
83	小春日や母がわたしにお辞儀して	高田久美代
84	店頭の古本に向く扇風機	津川 聖久
85	松手入戦なき世の城守り	田村祐巳子
86	カトレアへ扉開かれ大使館	〃
87	稲架けて砦のごとき棚田かな	小倉 豈煩
88	袖口に心地良き風盆踊	〃
89	タイヤ痕硬き畦道初御空	木染 湧水
90	フリージア矢印多ければ迷ふ	〃
91	母いつも何かに励み豆の花	加藤 和子
92	大なるの刻に黙禱春霞	山脇 敏男
93	手の平に貰ふ華やぎ雛あられ	〃
94	浜までの一本道を駆けて夏	中村 文子
95	高層の窓轟かすところどかな	〃
96	葉桜や体操服の下校の子	〃
97	女正月ふるさと違ふ者はかり	田村祐巳子
98	あたたかや母の財布に吾の名刺	下田あつ子

99 橋の名はみんなひらがな揚雲雀
 100 溜息の溜息を呼ぶ春の昼
 101 芽吹きたる被爆柳に千羽鶴
 102 いっぱしの威嚇を犬に子猫かな
 103 このままに隠れてゐたき大花野

山口県

1 宝船枕の固き湯治宿
 2 歳旦の日差に拾ふ鷹の羽根
 3 鏡餅割るやひとりに余りけり
 4 夜勤後の人無き職場おぼろ月
 5 建具師の肘よく動く十二月
 6 遠足の列吸ひ込まれ大仏殿
 7 鰐口の鈴緒の重き余寒かな
 8 濃き淡き海の静寂を泳ぎけり
 9 くるりくるり赤子見上ぐるはつ桜
 10 船ゆくや春帆楼の夕桜
 11 うしろ手にきのふを閉ちる白障子
 12 空の色空に返して冬の川
 13 かなかなや暝ればいつも遠き空
 14 一気飲みし水のうまきと帰省の子
 15 銀鼠に青注す碗や春の闇

黒宮 茂樹
 新長 麗子
 下村 幸夫
 井上 幸三
 上甫木はるひ

吉次 薫
 篠原 淳一
 三浦 宣子
 吉次 薫
 山本礼以子
 冬野 みち
 大田多恵子
 佐々木みどり
 墨海 游
 金澤 萬里
 島津 教恵
 吉田 房枝

16 黒板に大きく名前新教師
 17 入学児床に届かぬ足揺れて
 18 退職のけふの母校の桜かな
 19 きふより濃き炎天の棚田なる

徳島県

1 合宿の蚊帳吊つてあり体育館
 2 こつそりと冬帝裏口から入る
 3 人踏めば枯野の道となりにけり
 4 一本の骨となるまで枯芒
 5 足跡を足跡が消す斑雪
 6 雪嶺を背に常念よふるさとよ
 7 桜咲き散るに酔いては年経りぬ
 8 花の雨あの日ありて今のあり
 9 友去りぬ桜の花の散る中へ
 10 六月の竹青々と薬王寺

香川県

飯田 酔亥
 武市 忠明
 橋本まり子
 亀井きみ江
 詩 朋
 勝瑞屋高春
 岡田 貞幹

3 放哉の墓通り過ぐ島遍路
 4 春の雨石を重ねし神さまに
 5 薬や武門の宮の大銀杏
 6 水鉄砲待ち伏せの子の影伸びて
 7 野間馬の脚の太さよ夏来る
 8 湖風のまぶしくなりぬ抱卵期
 9 島浦の風に力や巢立鳥
 10 美しき野点の正座花衣
 11 一株の芹に躡く芹の水
 12 足裏にピーマンの種口げんか
 13 漁止めし老の立つ波止初燕
 14 山葵生ふ水鳴る方へ径とれば
 15 田に入りて大きく見ゆる稲刈機
 16 漣に選ばれてゐる花木かな

島田 章平
 三好 康夫
 利國 春美
 植田 桂子
 〃
 〃
 〃
 川本 一葉
 原 さくら
 宮武 濱女
 名越 奈緒
 原 文子
 端 あつ子
 〃

愛媛県

1 猪をかつぐ人に合掌径ゆづる
 2 山焼の炎鎮めの雨となる
 3 金剛の二字をいただき遍路杖
 4 涅槃西風こんべいたうをまた含み
 5 年玉の袋五枚の墨を磨り
 6 刻まれし洗礼名や山桜

安藤みつる
 梅木由紀美
 江崎紀和子
 〃
 村重 香霞
 瀬戸 薫

7 またひとつ歳を重ねて初鏡
 8 大きさを競へば割るるしやばん玉
 9 憂ひとつ草餅食べて忘れけり
 10 うつば草素顔のままの昨日今日
 11 白魚の飛沫もろとも競られけり
 12 水が水つかみて滝の凍てにけり
 13 剪定や空師を空の間に通し
 14 人の世に裏と表や障子貼る
 15 恐竜の名前すらすら入学児
 16 朝顔を咲かせ洗濯好きの人
 17 糸桜風に少しの重さあり
 18 落花しきりや水音を逸らせて
 19 年ごとに故郷は遠し竹の秋
 20 水底の泥たひらかに亀鳴けり
 21 畦焼きの煙の隠す道しるべ
 22 春雨や音しづかなる男傘
 23 登るほどなほ遙かなり天の川
 24 銀漢や海より深き島の闇
 25 稲の香や騒めきそめし夜の闇
 26 天狼や風に研がれし峰聳え
 27 左眼に少し春眠残りけり
 28 剝製に獣の臭ひ春霞
 29 瀬戸火鉢祖母の十八番のカルメ焼
 30 ちちろ鳴く父に甘えし頃のこと

越智 春代
 〃
 石九千恵子
 〃
 穴野 宏治
 〃
 〃
 〃
 野村タカ子
 〃
 川本恵美子
 山中 清子
 渡部津由子
 和泉 厚子
 平岡千代子
 松井 洋子
 〃
 〃
 〃
 〃
 赤松 孝宏
 柚山紀美子
 倉田 きみ
 公受美智子

31 秋の日の校歌で始まる同窓会

公受美智子

高知県

1 いっぱんの時間編みこむレースかな

石川 渭水

2 雁風呂の追焚き効きぬ窓の月

〃

3 たんぽぽの絮吹くだけの遠廻り

宮尾 直美

4 坂なりに海の展けて初燕

〃

5 休養馬柵に菌形や朝桜

徳廣由喜子

6 学校に津浪慰霊碑朝ざくら

〃

7 種物も土竜の罌も買ひにけり

藤原佳代子

8 さくらさくら内に秘めたる墨の色

平井 静江

9 土のものの土に還して耕せり

中平キリン

10 春愁の薬師仏その薬壺

〃

11 また一人逆打ちといふ花遍路

亀井しげみ

12 白魚のまなこに愁ひありにけり

〃

13 先生の柩にかける花衣

〃

福岡県

1 風光る子牛の耳に名札揺れ

田村 靖子

2 搔き落す馬の蹄の春の泥

〃

3 初桜岩に乾かす滝行衣

中田 ゆき

4 飛び鉋の陶器の温み春の雪

青竹 町子

5 バレンタインデー最後のパズルが嵌らない

金澤 晋治

6 卒業子校歌の川に稚魚還す

加藤 義博

7 古民家の昭和百年初つばめ

藤崎 良子

8 花屋から父のこと聞く彼岸かな

宮原 孝一

9 猪捌く道具並びて静かなり

河原 敬子

10 健脚の母へ朝採れ茄子の馬

中嶋 磨澄

11 厄年のもう来ぬ齢豆の花

松本ゆきこ

12 天空の限界集落胡沙来る

宮田 三致

13 秋水に立つ白鷺の孤高かな

荒木 信夫

14 何方がどつちあめんぼとその影と

永田 英子

15 逃水を追うて国道一号線

〃

16 たんぽぽや水路に掛くる渡り板

大野 兼司

17 途切れなく繋ぐ女系や雛の家

成毛 妙子

18 猪口に大吟醸母の日の仏壇

江口三枝子

19 火に水に神在す国新走り

角野 良生

20 違ふ物探し出したる春の昼

轟 あかね

21 すれ違ふ人の廻せし春日傘

井上 寿子

22 揚雲雀牧場の牛の太き乳

塩川 隆三

23 年惜しむ妻の味噌汁妣の味

福田 隆

24 花を待つこの幾日の永きこと

木本 敬子

25 宵宮の星を揺らして大太鼓

梅津 稚子

27 入れ替はり受験子祓ふ宮司かな
28 つばくらめ上棟式の進みをり
29 春の日や女ばかりの形見分け
30 螢は風を切ることに無かりけり
31 担担と母の百年山ざくら
32 虫出しの雷や早寝の老農夫

安藤 順一
〃
〃
坂口 学
砥綿 文子
河村美登里

佐賀県

1 防人の島の潮騒島帰る
2 無念なる被爆の父の長崎忌
3 昭和史に戦と平和敗戦日
4 知るはずの街に迷ふや花衣
5 ぶらんこを立ち漕ぎ空へ飛び込みぬ
6 五十年会わず忘れず年賀状
7 ぶらんこに酔うて休日終わりけり
8 真白とは貫禄のいろ花菖蒲

大石ひろ女
辻 洋子
〃
栗林 白霜
古賀由美子
大澤ヨシノ
市丸万由美
大隅 三虎

長崎県

1 酒蔵の通し柱や秋高し
2 かたちなき水を束ねて落ちる滝

永福 倫子
旗先四十三

3 梅が香や坂を下りたり登つたり
4 春寒し声は元気な車椅子
5 末の子の前髪を上げ卒業す
6 薫風や睫の長き裸馬
7 手に止まる小雪払ひて母見舞ふ
8 豆を撒く命繋ぎし爺と孫
9 啓蟄や一人暮らしをせよと父
10 癌といふ死を飼ひ馴らし漕ぐ鞆轡
11 入学や子を東京に取られたる
12 母入れて箱は柩に鳥雲に
13 精霊舟御魂流すや被爆川
14 黒ネクタイ外し熱燗酌みにけり
15 鬼の子のやがて名を棄て家も捨つ
16 白息の烈火のごとき罵声浴ぶ
17 ぜんまいの渦のしろがね陶の里

中尾 和枝
松尾 酔雲
高永 久子
江里口水子
出口彰遊子
〃
中村ひで子
小谷 一夫
〃
〃
〃
牛飼 瑞栄
〃
永野 濶子

熊本県

1 カラフルなボルダリングの壁四温
2 らくがんのうすくれなゐもしぐれの忌
3 熟睡せる子は白桃の匂ひして
4 さくらさくら空に喝采あることし
5 幼子のおしやべり何語チューリップ

若松 節子
加藤いろは
〃
〃
園田 夕子

6 茶道部の男手前や風光る

荒尾かのこ

大分県

- 1 枯山の木偶になる木とならぬ木と
2 支流の名変はり本流鮎落つる
3 母の里今は更地に都草
4 あとせてもう一匙と七日粥
5 水仙花水の静けさありにけり
6 かかかかと風引き摺つて子が走る
7 大瀑布ベロ藍色の飛沫とも
8 弁柄の部屋の歳月梅一輪
9 桃の花故郷に古りし鯨墓
10 寒卵かけてみようか備蓄米
11 子を送り常の夕餉の秋の暮
12 花時の喉にしぶとき小骨かな
13 ぼつねんと震災遺構春満月
14 蛇出でて国東の野の眩しけれ
15 夜の落花鎮めのトロイメライかな
16 城址ひとところ火攻めの曼珠沙華
17 亡き人と見るにほどよき遠桜
18 サングラス掛けて別れの目をそらす
19 新樹の夜独りの箸を洗ひをり

阿部 正調
松本みゆき
南雲 玉江
佐々木素風
小松 生長
〃
佐々木素風
尾平 貴子
芋岡 勝一
吾 亦 紅
牧 静子
花本 公明
利光 幸子
田邊 博充
〃
〃
平田はつみ
佐藤眞理子
有宗 眞弓

- 20 観音の胸の膨み養花天
21 この部屋で看取る覚悟や雛飾る
22 みちのくの鎮魂の海辛夷咲く
23 大寒の水をきりりと使ひきる
24 風光る牛に大きな乳房かな
25 寄書きの真中は和の字卒業す
26 チューリップ余所見してゐるランドセル
27 一本のつくしを摘んで旅心
28 ドクターの朝の回診そぞろ寒

富川 元女
富尾 和恵
〃
川野 智子
〃
矢野 安鎮
首藤 加代
亀田多珂子
〃

宮崎県

- 1 春光や回し広げるピザの生地
2 春の雪母とはいつも待つ役目
3 風光るひとつ窓足す設計図
4 春昼や搾乳場へ牛の列
5 あたたかやじやんけんぼんの最初はグー
6 ばればれの手品の仕掛花の下
7 挿鉢に移るさみどり春惜しむ
8 咲き満ちて佳き風待てり桜花
9 花は葉に一枚岩の波しぶき

藤原 李苑
飯干 久子
大爺眞理子
内田 江里
伊藤 容子
日高まりも
〃
毛利美智子
柚木崎幸子

鹿兒島県

- 1 クレソンの息の根ゆらす水の音
- 2 よく弾む洗濯ばさみ夏来る
- 3 眉毛濃き父の面影かんかん帽
- 4 女子寮のフロントに立つ紙雛
- 5 守りゆく瑞穂の国や種浸す
- 6 みどり児の固き拳や風光る
- 7 薄氷のなまくらとなり漂へる
- 8 毀つ家を掃きをさめけり花の昼
- 9 売られゆく軍鶏の鋭きこゑ花の昼
- 10 木蓮の和毛に夕日とどめけり
- 11 締め直す固き詰襟花は葉に
- 12 海峡の見ゆる生家や花曇
- 13 余生にも為すこと数多日短し
- 14 豆腐屋の昏き水槽貝風鈴
- 15 冷し瓜風よく通る母の家
- 16 蝌蚪泳ぐ休耕田の水たまり

藤元 睦子
羽立 郁芳
蘭 孝湖
松木 蘭かつ子
谷口 千枝子
〃
池田 貴之
中間 恵子
〃
梶 みつ
榊 秀樹
山 寄加代子
中村 池塘子
岩井 三葉
窪見 れい
〃

- 1 甘蔗刈に呼ばれしみの休暇とや
- 2 平家枕父の昼寝の痕しるし
- 3 芭蕉布や祖母は機織り母育て
- 4 花いばら沖は太古の瑠璃の色
- 5 首里城の再建進む小春かな
- 6 甘蔗刈つて風新しくなりにけり
- 7 一瞬にきはだつうなじ桜東風

宮城 勉
〃
上江 洌一石
仲間 文子
宮城 章
筒井 慶夏
津嘉山 典

沖繩県

◎ 大会賞受賞者 略歴・感想

穴野^{ししの} 宏治^{こうじ}

本 名 穴野宏治
現住所 愛媛県松山市

略歴 昭和二十二年大阪市生。平成九年阪本謙二主宰「櫟」入会。その後、現主宰江崎紀和子主宰に師事。櫟同人。俳人協会会員。

感想 この度は大会賞のご通知を頂き、ご選考を頂きました諸先生方に心より感謝申し上げます。さて、私は感動したことを中心に俳句を大いに楽しもうと励んでいます。しかし感動を的確に表現することができないのが現状です。これらの事象の中で以前に吟行で遭遇した滝等は私に何を話したかったのかと吟行の後で思案することが度々あります。受賞句はその過程でふっと脳裏に降りてきた一句です。そうだったのかと一人で合点して今回投句させて頂きました。今後この俳句への取り組み方を忘れずに精進したいと思っています。誠に有難うございました。

石橋^{いしばし} 康徳^{やすのり}

本 名 石橋康徳
現住所 広島県安芸郡

略歴 昭和十六年広島県生れ。長く俳句に縁が無く、定年後六十五歳にして木村里風子主宰「楓」に入会、俳句を始める。俳人協会会員。昨年主宰逝去後、「楓」終刊。無所属として活動。

感想 長年の投句、伴わない結果。投げ出して堪まるものと続けて、今回の受賞となりました。喜ばしいかぎりです。選んでいただいた先生方に深く感謝いたします。

ひらお
平尾 美緒

本 名 平尾美緒

現住所 東京都杉並区

略歴 一九六五年 東京生まれ

二〇一三年 「惜春」 入会

二〇一六年 「雛」 入会 俳人協会会員

二〇二〇年 句集『鳥巢立つ』

感想 この度、大会賞のお知らせをいただき、ただただ驚いております。

受賞句は昨年文京区本郷を吟行した時に詠みました。金魚坂にあった江戸時代よりの金魚問屋が閉店し更地になっており、時代とともに変わるものの寂しさを感じました。けれどそこにいた金魚達は今もどこかできつとかわいいられているだと思いました。

御高選を賜りました先生方に深く御礼申し上げます。今まで御指導下さいました結社の主宰である先生に心より感謝しております。有り難うございました。

かめざわ
亀澤 淑子

本 名 亀澤淑子

現住所 静岡県静岡市

略歴 昭和二十二年、愛知県名古屋市長生れ。平成元年、沢木欣一、細見綾子の「風」に入会。師亡き後平成十七年に「万象」に入会、その後同人。平成二十一年檜山哲彦が創刊した「りの」に創刊同人として参加。りのの賞二回受賞。「りの」終刊現在は無所属。俳人協会会員。

感想 この度は、大会賞をいただき身に余る光栄で感謝に堪えません。

現在は夫との二人暮らしで、なかなか片付けられない炬燵とテレビが生活の多くの部分を占めています。その中から生まれた句です。

句に対する複雑な心情を深く汲み取っていただき嬉しく思います。

俳句によって得た、師や句友そして人生に心より感謝します。

かどの
角野 良生 よしを

現住所 福岡県福岡市

略歴 昭和九年 京都市生まれ

昭和六十二年 伊藤通明主宰「白桃」入門

平成二十八年 柴田佐知子主宰「空」入会

句集『山椒魚』『大江山』

感想 この度は思いがけず、大会賞の栄を賜り有り難うございました。

普段は神など信じていないのですが、ときに山川や海空の現象に自然の意思を感じ、畏敬の念を持つことがあります。

人の暮らしに尤も身近で、何より大切な火と水も、神宿るに尤も相応しく思えます。

蔵開きなどで造酒屋を訪ねた時、絞り出される生酒を飲んで試飲させて貰った時など、まさに火と水の神が育んだ新酒をいただく心地です。

こじま
小嶋 トシコ

本 名 小嶋登志子

現住所 富山県射水市

略歴 平成十年「狩」入会、鷹羽狩行先生、片山由美子先生に師事。平成二十六年、狩同人。平成三十年「狩」終刊。

令和元年「香雨」入会。

感想 この度は思いがけず大会賞のお知らせをいただき感激一入でございます。ご高選を賜りました先生方に厚く御礼を申し上げます。

日頃ご指導いただいております主宰に諸先輩誌友の皆様に感謝のほかありません。

入選句は町内の集会が終つての帰り道広場に遊んでいた子供達とお菓子を分かち合つた時に、いつになくすんなりと授かつたものです。終生忘れない句になりました。ありがとうございます。

俳人協会創立65周年記念

第65回 全国俳句大会予告

◇募集 2句一組〈雑詠・未発表のもの〉

何組でも可。

◇会費 一組につき千円の予定。

◇締切 来年4月15日（当日消印有効）

◇送付先 〒169-8521 東京都新宿区百人町3-28-10

俳人協会「全国俳句大会係」

◇選者 追って発表します。

◇大会 来年9月8日（火）〈予定です〉

午後1時開会。

◆当日参会者より一句を募集、特選、入選句には賞品を贈呈。

会場略図



有楽町マリオン

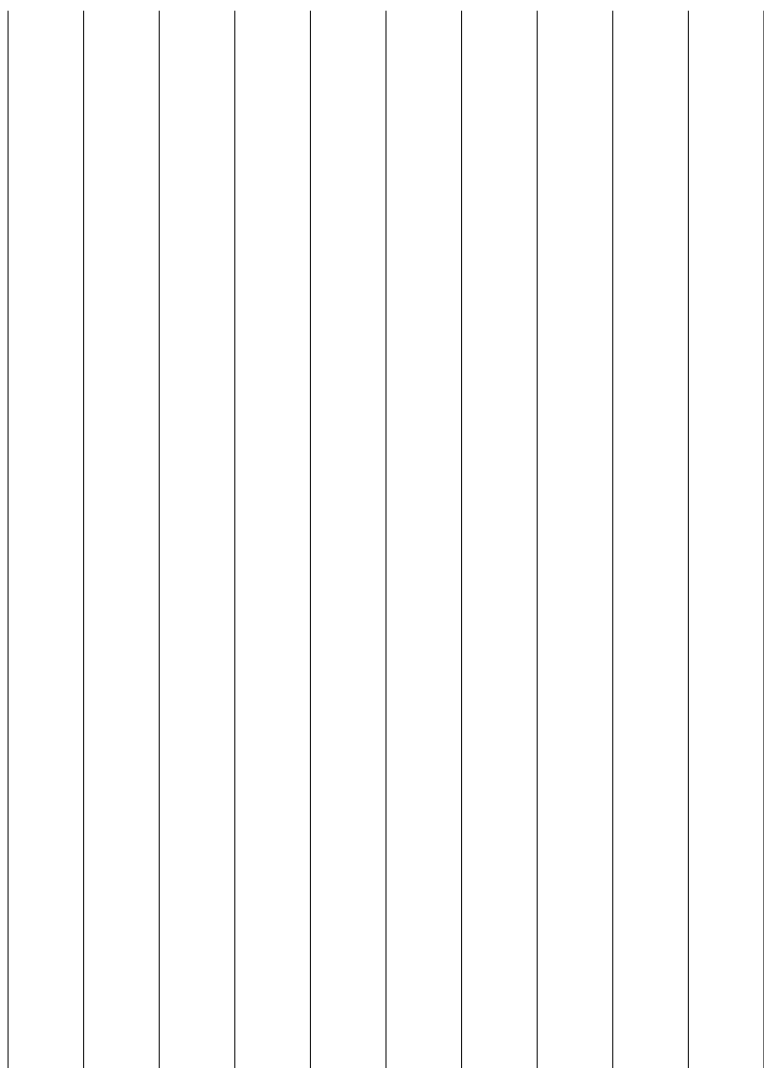
有楽町朝日ホール

東京都千代田区有楽町2-5-1

有楽町マリオン11階

電話 03 (3284) 0131

[illegible]



第64回全国俳句大会 選句集

令和 7 年 9 月 16 日 発行

公益社団法人 俳 人 協 会

〒169-8521 東京都新宿区百人町3-28-10 俳句文学館内

TEL (03) 3367-6621 FAX (03) 3367-6656



公益
社団法人

法人協会